

久留倍遺跡 3

2008(平成20)年3月

四日市市教育委員会



調査区の西から東を望む

例言

- (順不同、敬称略、所属は当時)
- 尾野善裕(京都国立博物館) 城ヶ谷和広(愛知県埋蔵文化財センター)
- 現地調査には下記の方々のご協力を得た。記して感謝の意を表します。(順不同、敬称略)
- 国土交通省中部地方整備局北勢国道事務所 日本土建株式会社 伊藤一彦 吉原照勝
- 当調査においては、空中写真測量を(株)イビソクに委託して行った。
- 調査記録及び出土遺物は、四日市市教育委員会において管理、保管している。
- 本書で用いた遺構実測図は、国土調査法による第Ⅵ座標系を基準とし、挿図の方位は全て座標北で
- 本書における遺構表示略記号は以下のとおりである。
- S B : 掘立柱建物、S D : 溝、S E : 井戸、S H : 竪穴住居、S K : 土坑、P : ピット・小穴・

本文目次

I 前 言

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経過	2

II 位置と環境

1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3

III 調査の成果

1. 調査の方法	6
2. 地形概要及び基本層序	6
3. 遺構	9
(1) 弥生時代	9
(2) 古代	14
(3) 中世	15
4. 遺物	19
(1) 弥生時代	19
(2) 古墳時代～古代	22
(3) 中世	22
5. まとめ	22

巻末 報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	調査区位置図	1	第12図	SD1426・1446実測図	13
第2図	久留倍遺跡位置図	4	第13図	SB1451実測図	15
第3図	久留倍遺跡地形図	6	第14図	SB1451P2遺物出土状況実測図	15
第4図	遺構平面図	7	第15図	SK1414実測図	16
第5図	調査区土層図	8	第16図	SD1429埋土土層図	16
第6図	SH1403・1404・1406実測図	10	第17図	SD1426遺物等出土状況実測図	17
第7図	SH1415・1419・1421実測図	10	第18図	2I43P7遺物出土状況実測図	17
第8図	SH1428、SK1437実測図	11	第19図	SE1450実測図	17
第9図	SK1416、SK1430実測図	12	第20図	出土遺物実測図①	19
第10図	SK1417・1420実測図	12	第21図	出土遺物実測図②	20
第11図	SD1007遺物出土状況実測図	13	第22図	出土遺物実測図③	21

挿 表 目 次

第1表	遺構一覧表	18	第2表	出土遺物観察表	23・24
-----	-------	----	-----	---------	-------

図 版 目 次

巻頭図版	調査区の西から東を望む	図版5	SK1437 SH1441 SK1416
図版1	調査区全景	図版6	SK1430 SD1446 SB1451P2遺物出土状況
図版2	SH1403・1404・1406 SH1415・1419・1421・SK1414	図版7	SK1420 2M41P3遺物出土状況 2I43P7遺物出土状況
図版3	SH1428 SH1428遺物出土状況	図版8	出土遺物
図版4	SK1417 SD1007遺物出土状況 SD1426遺物等出土状況		

I 前 言

1. 調査に至る経緯

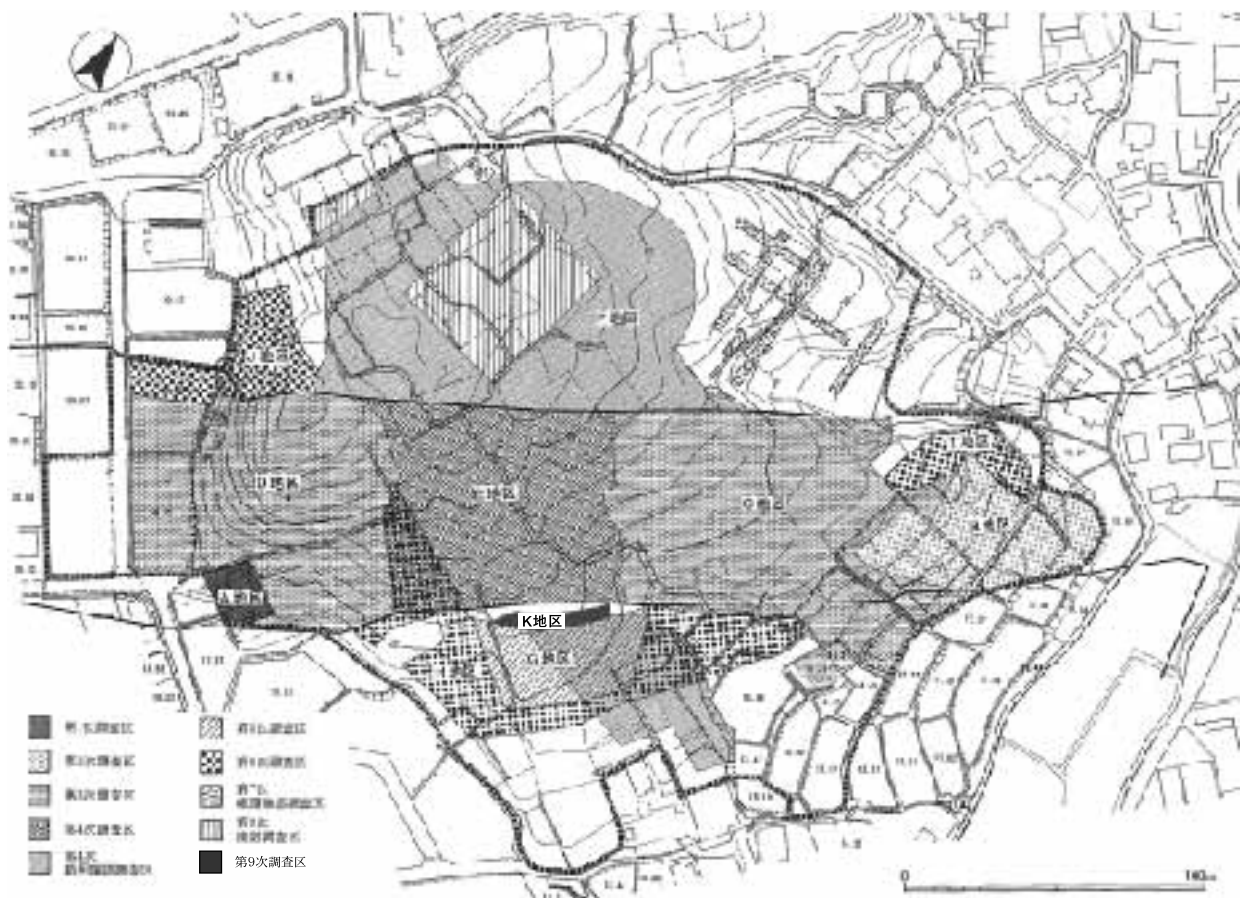
久留倍遺跡は、以前より地元住民に良く知られた遺跡であり、実際地表面には多くの遺物が見られた。収集家による資料が存在することも、昭和36年（1961）刊行の『四日市市史』に掲載されている。遺跡範囲は丘陵全体に及び、東西約350m、南北約300mである。市遺跡番号74として周知されていたが、昭和63年（1988）、遺跡の中央を貫くように一般国道1号北勢バイパスの建設計画が建設省（当時）により事業化された。

北勢バイパスの路線部分及び「道の駅」建設予定地の約47,000㎡を対象として、平成11年度以降8次にわたって発掘調査及び範囲確認調査等を実施している。これまで縄文時代から中世にかけての様々な遺構、遺物が確認されているが、平成14年度（第3次調査、C地区）から平成15年度（第4次調査、

E・F地区）にかけての調査により、区画溝で囲まれた正倉院、東向きの政庁、周辺の館・厨と推定される施設等が一体として確認され、古代伊勢国朝明郡の郡衙ではないかと注目された。

平成16年度にかけて遺跡保存の機運が高まり、三重県教育委員会や国土交通省等、関係機関で協議を重ねた結果、本線部分は高架にすること、側道は東側に迂回することで政庁・正倉院部分を現地で保存することが決定された。平成17年度には官衙遺構の範囲確認調査を実施し、その成果に基づいて史跡指定申請範囲を決め、平成18年2月に国指定史跡に申請、同年5月に「久留倍官衙遺跡」として指定の答申がなされ、同年7月28日付けで指定された。

平成18年度、市教育委員会では久留倍官衙遺跡を整備・活用するため、「久留倍官衙遺跡整備基本計画書」を策定する作業を進めていた。その過程で、側道を境に西側に広がる史跡範囲地区と東側のガイ



第1図 調査区位置図（1：2,500）

ダンス施設や駐車場を建設する地区を往来するために、側道に地下道を設けることが決まった。国土交通省中部地方整備局北勢国道事務所と協議した結果、国土交通省が実施する北勢バイパス工事の附帯工事として地下道設置工事も行ふこととなった。地下道を設置した場合、より標高が高い側道西側では側道を抜けると地下にもぐることになり、地上へ出るためにスロープを設けなければならなかった。このスロープは側道と史跡範囲の間に設置することが可能であったが、この範囲は遺跡の調査がまだ行われていない部分であったため、事前の発掘調査を実施する必要があった。調査時期を北勢国道事務所と調整し、平成18年度9月補正予算に調査経費を計上し、平成18年11月から平成19年1月までを発掘調査期間とすることとした。また、室内整理作業及び報告書作成は平成19年度に行ふこととした。

なお、調査担当者の事務処理を軽減し、かつ安全管理を徹底するため、現場作業における労務管理は委託して実施した。

〔文化財保護法等にかかる諸手続き〕

文化財保護法（以下「法」）等にかかる諸通知は以下により三重県教育委員会教育長等に行っている。

・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項（県教育長宛）「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」平成18年10月27日付け社会第514号

・法第99条（県教育長宛）「埋蔵文化財発掘調査の報告について」平成18年11月14日付け社会第536号

・遺失物法第1条第1項（四日市北警察署長宛）「埋蔵文化財発見届」平成19年11月1日付け社会第573号

2. 調査の経過

今回の調査は久留倍遺跡としては第9次調査となり、地区はK地区となる。調査箇所は、南東がG地区（側道工事に係る調査）に接し、北西が史跡範囲に接する細長い範囲である。南東側のG地区は調査当時既に一時的な沈砂池として大きく掘削されており、柵

で囲われていた。北東側は、正倉院の中に設置される橋脚の仮の工事用通路が通されていた。このように周囲が北勢バイパス建設工事の最中であり、排土置き場等かなり制限された中での調査であったが、工事関係者には十分な配慮をいただいて円滑に調査を進めることができた。

平成18年10月末に現地の除草作業を行い、現場事務所等の準備が完了した後、11月6日から調査を開始した。まず表土を重機により排出した後、北東側から遺物包含層掘削、遺構検出作業を進めた。全体的に遺構検出面が不明瞭であったため、遺構の確認に手間がかかった。

比較的天候には恵まれ、年を越える前に調査は完了した。実働33日間、作業員数は述べ約190人であった。

〔調査日誌（抄）〕

平成18年

11月6日 重機により表土除去開始。

11月9日 作業員投入。

11月10日 北東端部で竪穴住居の周溝を複数確認。

11月15日 SH1415・SK1414確認。

11月17日 SK1417・1420の重複確認。

11月22日 SD1007弥生土器出土状況の実測、撮影。

11月24日 SB1451P2土師器出土状況の実測、撮影。

12月1日 タワーから調査区北東部撮影。

12月4日 SB1451がG地区にまたがっていることを確認。SH1428確認、遺物出土。

12月5日 SD1429埋土の分層確認。SE1450確認。

12月11日 2I43P7土師器皿出土。

12月14日 SK1437埋土に炭化物層確認。

12月15日 SD1426山茶碗等出土状況の実測、撮影。

12月19日 SD1429下層からSH1441確認。

12月22日 SD1446完掘。

12月25日 空中写真撮影。タワーから全景撮影。

12月28日 埋め戻し完了。

Ⅱ 位置と環境

1. 地理的環境

四日市市は三重県の北部に位置し、東を伊勢湾に、西を鈴鹿山脈に限られる。市域を流れる主な河川は鈴鹿山脈に源を発し、概ね東流して長く幅の狭い谷底平野を形成して伊勢湾に注ぐ。東部の海岸平野は、かつては東海道、現在は国道1号や23号、JR、近鉄等南北方向に交通網が発達し、伊勢湾に面する四日市港も物流の拠点となっている。

久留倍遺跡は四日市市の北東部、大矢知町字久留倍、字矢内谷に所在する。朝明川と海蔵川に挟まれた垂坂丘陵の東端部に位置し、小谷によって区切られた東へ扇状に広がる緩やかな丘陵斜面を占地する。面積約105,000㎡で、標高は10mから30mである。丘陵先端の少し突き出た場所であるため、東方は180°以上の眺望が得られ、北方の朝日丘陵や朝明川、東方から南方の海岸平野や伊勢湾を見渡すことができる。

2. 歴史的環境

久留倍遺跡(1)を取り巻く歴史的な経過を、関連する時代を中心に簡単にみていきたい。文中の()数字は第2図の久留倍遺跡位置図に対応する。

旧石器・縄文時代 海岸に近いこの地域では当該期の遺跡はほとんどない。西ヶ広遺跡(2)や伊坂遺跡(3)でわずかな遺構が検出されている程度である。なお、久留倍遺跡第3次発掘調査(D地区)で、自然流路(谷)から縄文土器が数点出土している。

弥生時代 海岸平野に面する丘陵端部に遺跡が開している。生桑丘陵に所在する大谷遺跡(4)と永井遺跡(5)は、前期の複数の環濠を有する遺跡として知られている。朝明川左岸の朝日丘陵南東部には、高規格道路建設に伴う近年の大規模な調査によって中期以降の遺跡が集中的に確認されている。竪穴住居と大型掘立柱建物で構成される大規模な集落が中期後半に菟上遺跡(6)で形成され、後期には西ヶ広遺跡に移る。丘陵頂部の金塚遺跡(7)に

は環濠を有する高地性集落が営まれ、丘陵先端の山村遺跡(8)にも環濠が巡る。一方、低位河岸段丘に立地する辻子遺跡(9)では、中期から後期の集落及び水田が検出された。墓域は、金塚遺跡に墳丘墓が存在し、方形周溝墓は20基を数える山村遺跡の他、菟上遺跡や丘陵尾根の広永遺跡(10)、低位河岸段丘の間ノ田遺跡(11)等で見ついている。また、伊坂遺跡では扁平紐式袈裟襷文銅鐸が、金塚遺跡では銅鐸片が出土している。朝明川右岸の地域では、下之宮遺跡(12)で中期前葉の土器がまとまって出土し、中期後葉には久留倍遺跡で小規模な集落がみられる。

後期には山奥遺跡(13)で県下有数の大規模な集落が営まれ、金属製品や土製模造鏡等が注目される。雲天遺跡(14)でも後期の土器が多く出土している。久留倍遺跡ではこの時期には集落とともに方形周溝墓も存在している。海蔵川左岸の上野遺跡(15)では中期の集落と方形周溝墓が確認されている。

古墳時代 弥生時代後期の大集落は古墳時代へは続かず、久留倍遺跡を含め小規模な集落がみられる程度である。古墳も朝明川流域には確認されておらず、やや南に下った阿倉川台地の先端に位置する志氏神社古墳(16)が前期の前方後円墳と思われる。中期では、集落はまだ確認されていないが、松山古墳(17)や、未調査であるが広古墳群(18)、浄ヶ坊古墳群(19)等、比較的大型の円墳・方墳が朝明川左岸のまとまった地域に築造されており、有力者一族の墓域の可能性が考えられる。

後期以降、特に7世紀には集落や古墳は飛躍的に増加する。古墳は小規模な群集墳が多く造られ、八幡古墳(20)のように横穴式石室を主体とすると思われるが、この朝明川下流域には横穴墓も多く、その導入の背景が注目される。久留倍遺跡では、6世紀代の群集墳や7世紀代の横穴式石室及び木棺墓が確認されている。

垂坂丘陵周辺には古墳時代中期から奈良時代の須恵器窯が点在し、また山奥遺跡や西ヶ谷遺跡(21)では土師器焼成坑も確認されている。



- | | | |
|------------------|------------|-------------------------|
| 1. 久留倍遺跡 | 12. 下之宮遺跡 | 23. 貝野遺跡 |
| 2. 西ヶ広遺跡 | 13. 山奥遺跡 | 24. 縄生廃寺 |
| 3. 伊坂遺跡 | 14. 雲天遺跡 | 25. 大膳寺跡 |
| 4. 大谷遺跡 | 15. 上野遺跡 | 26. 大谷瓦窯跡 |
| 5. 永井遺跡 | 16. 志氏神社古墳 | 27. 大矢知山畑遺跡 |
| 6. 菟上遺跡 | 17. 松山古墳 | 28. 垂坂山観音寺 |
| 7. 金塚遺跡・横穴墓 | 18. 広古墳群 | 29. 天武天皇迹太川御遥拝所跡 |
| 8. 山村遺跡 | 19. 浄ヶ坊古墳群 | 30. 「天武天皇神宮御遥拝所」碑（糠塚古墳） |
| 9. 辻子遺跡 | 20. 八幡古墳 | 31. 聖武天皇社 |
| 10. 広永城跡・古墳群・横穴墓 | 21. 西ヶ谷遺跡 | |
| 11. 間ノ田遺跡 | 22. 中村遺跡 | |

第2図 久留倍遺跡位置図（1：50,000）〔国土地理院1：25,000 桑名・菰野・四日市東部・四日市西部〕

飛鳥時代～奈良時代 朝明川流域を中心とする古代朝明郡に関わると思われる発掘調査成果が相次ぎ、今後の研究に大きな期待が持たれる。西ヶ広遺跡で確認された奈良時代の計画的に配置された大型の掘立柱建物群は、官衙に関連する可能性が高い建物群である。谷を隔てた丘陵上に広がる菟上遺跡では、西ヶ広遺跡より古いコ字形に配置された掘立柱建物群が見つかっている。一方久留倍遺跡では、溝で方形に区画された内側に整然と並ぶ総柱の掘立柱建物が確認され、朝明郡の正倉院跡と推測された。また、これより古いと考えられる東向きの正殿や八脚門等政庁の施設、大規模な東西棟の掘立柱建物等も確認された。対して、山村遺跡、中村遺跡（22）、貝野遺跡（23）などはこの時期の一般的な集落と思われる遺跡である。

朝明郡で確認されている古代の寺院としては、三重郡朝日町の縄生廃寺（24）が挙げられる。西ヶ谷遺跡や伊坂遺跡ではまとまった量の瓦が出土し、前者は小規模な堂の存在が、後者は瓦窯の存在が想定される。また、大量の瓦が出土した大膳寺跡（25）は、大谷瓦窯（26）とともに平安時代に属する。

平安時代 前期には久留倍遺跡では引き続き正倉が建てられている。久留倍遺跡の南に位置する大矢知山畑遺跡（27）は出土遺物に特色があり、有力者の居館か寺院関連の遺跡とみられる。当時、当地域に大きな影響を及ぼしたと思われるのは、現在も信仰を集める垂坂山観音寺（28）で、10世紀前葉に建立され大いに栄えたという。大膳寺跡もその末寺の1つと伝わるが、発掘調査で出土した瓦や土器は観音寺建立より古い。上野遺跡では人名の墨書灰釉陶器が出土し注目される。辻子遺跡は、古代末期に朝明郡が神郡に寄進された後に有力な勢力が存在した可能性が指摘されている。

中世 久留倍遺跡では中世の遺構・遺物も多く、井戸、溝、区画溝を伴う塚墓、火葬墓等を確認した。菟上遺跡では中世前期の集落と中世後期の大火葬墓群が見つかった。上野遺跡は区画溝と掘立柱建物が確認され、貴重な中世の集落資料となっている。

参考文献

- 『四日市市史 第一巻 史料編 自然』四日市市 1990
『四日市市の土地分類』四日市市土地分類調査会 1992
『四日市市遺跡地図一改訂版一』四日市市教育委員会 1994
『四日市市史 第二巻 史料編 考古Ⅰ』四日市市 1988
『四日市市史 第三巻 史料編 考古Ⅱ』四日市市 1993
『みえあさひ文化財マップ』朝日町 1999
『久留倍遺跡 範囲確認発掘調査報告書』四日市市教育委員会 2006
『久留倍遺跡2』四日市市教育委員会 2007
『一般国道1号北勢バイパス 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅸ』四日市市教育委員会 2006
『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県文化財連盟 1970
『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2002
『研究紀要 第13号』三重県埋蔵文化財センター 2003
『伊坂遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2004
『山村遺跡（第2次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2004
『辻子遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2004
『間ノ田遺跡・辻子遺跡（第4次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2005
『菟上遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2005
『広永横穴墓群・広永1号墳・広永城跡・広永遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2006
『西ヶ広遺跡（第3・4次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2006
『縄生廃寺跡発掘調査報告』朝日町教育委員会 1988
『大谷遺跡発掘調査報告書一A地区、B地区一』四日市市教育委員会 1966
『大谷遺跡発掘調査報告Ⅱ一C地区の遺構一』四日市市教育委員会 1976
『大谷遺跡発掘調査報告Ⅲ一C地区の遺物一』四日市市教育委員会 1977
『西ヶ広遺跡発掘調査報告一D地区一』四日市市教育委員会・四日市文化振興会 1972
『永井遺跡発掘調査報告』四日市市教育委員会 1973
『四日市の後期古墳』四日市市教育委員会 1973
『大膳寺跡』四日市市教育委員会 1978・1979・1980・1981・1982
『上野遺跡』四日市市遺跡調査会 1991
『上野遺跡2』四日市市遺跡調査会 1992
『西ヶ谷遺跡』四日市市遺跡調査会 1996
『西ヶ谷遺跡3』四日市市教育委員会 2002
『西ヶ谷遺跡4』四日市市教育委員会 2002
『西ヶ谷遺跡5』四日市市教育委員会 2005
『大矢知山畑遺跡』四日市市教育委員会 2002
『山奥遺跡Ⅰ』四日市市教育委員会 2003
『山奥遺跡Ⅱ』四日市市教育委員会 2004

Ⅲ 調査の成果

1. 調査の方法

調査は調査区内に小地区（グリッド）を設定し行った。これまでに実施された北勢バイパス建設に伴う久留倍遺跡発掘調査に従い、旧国土座標第Ⅵ系（日本測地系）を用いて4m方眼に区画した。グリッドの表示もこれまでの発掘調査に共通したもので、東西方向は西からアルファベットを、南北方向は北から数字を付している。

北勢バイパス建設に伴う久留倍遺跡の発掘調査報告書を作成中であるため、久留倍遺跡全体の遺構番号はまだ確定していない。そのため今回の調査による遺構番号は、これまでの調査の遺構数が超えないものとして、「1401」から通し番号を付した。た

だし、G地区と同一遺構と判断される遺構については、既に付与された番号を用いた。

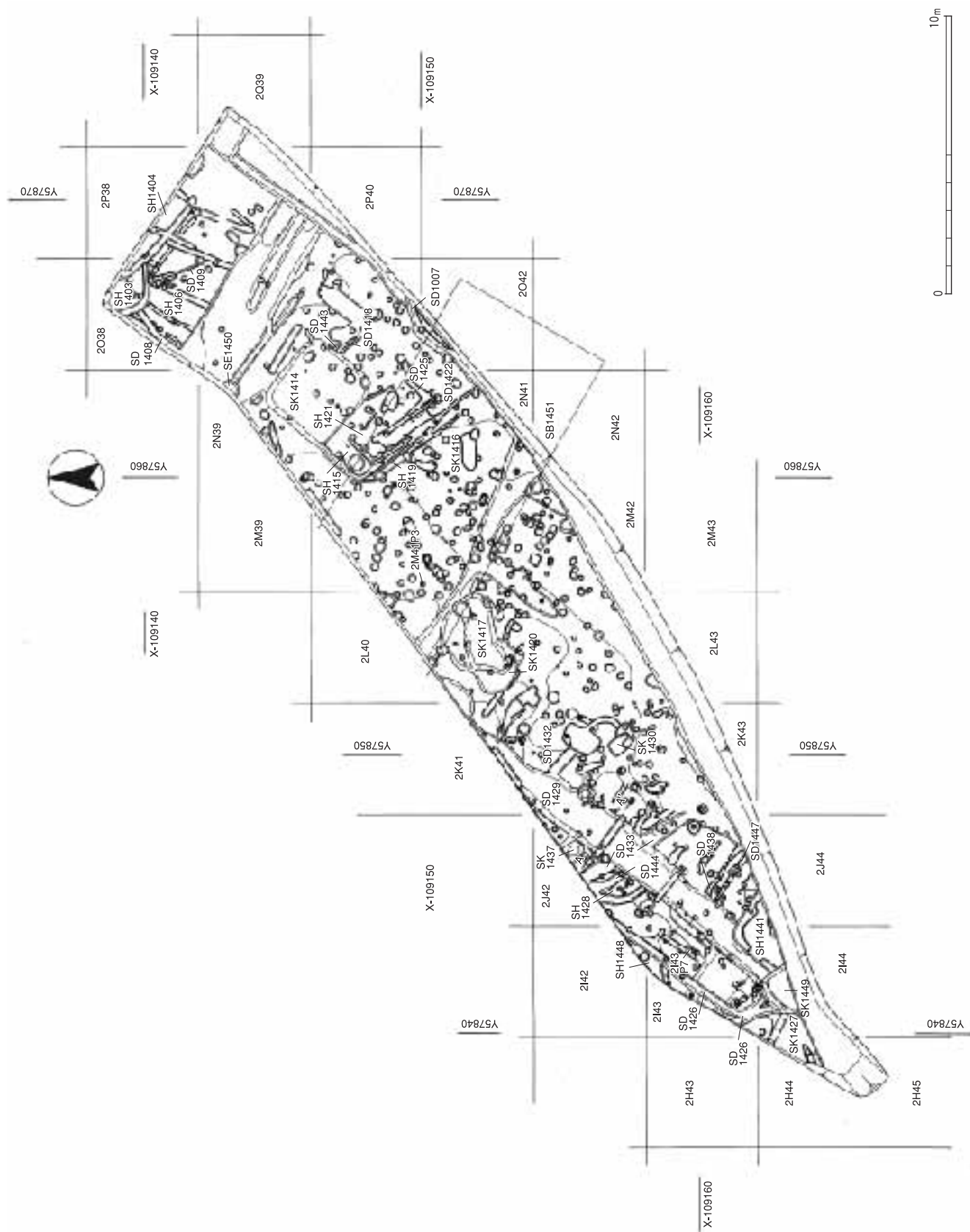
2. 地形概要及び基本層序

今回の調査区は東へ緩やかに下る丘陵斜面に位置する。等高線に平行するような細長い調査区で、調査区南西部のSD1426付近を頂点として、北西から南東方向に、またごく緩やかに北東方向へ傾斜する。最高点は21.18mで、調査区北東端部が一段下がって最も低く標高20m前後である。

基本的な層序は、最上層（第1層）が北勢バイパス建設工事に伴う盛土で、第2層が元の表土である。第3・4層の砂質土は含まれる陶器により近世以降の堆積土であろう。第5・6層は粘質土で遺物包含

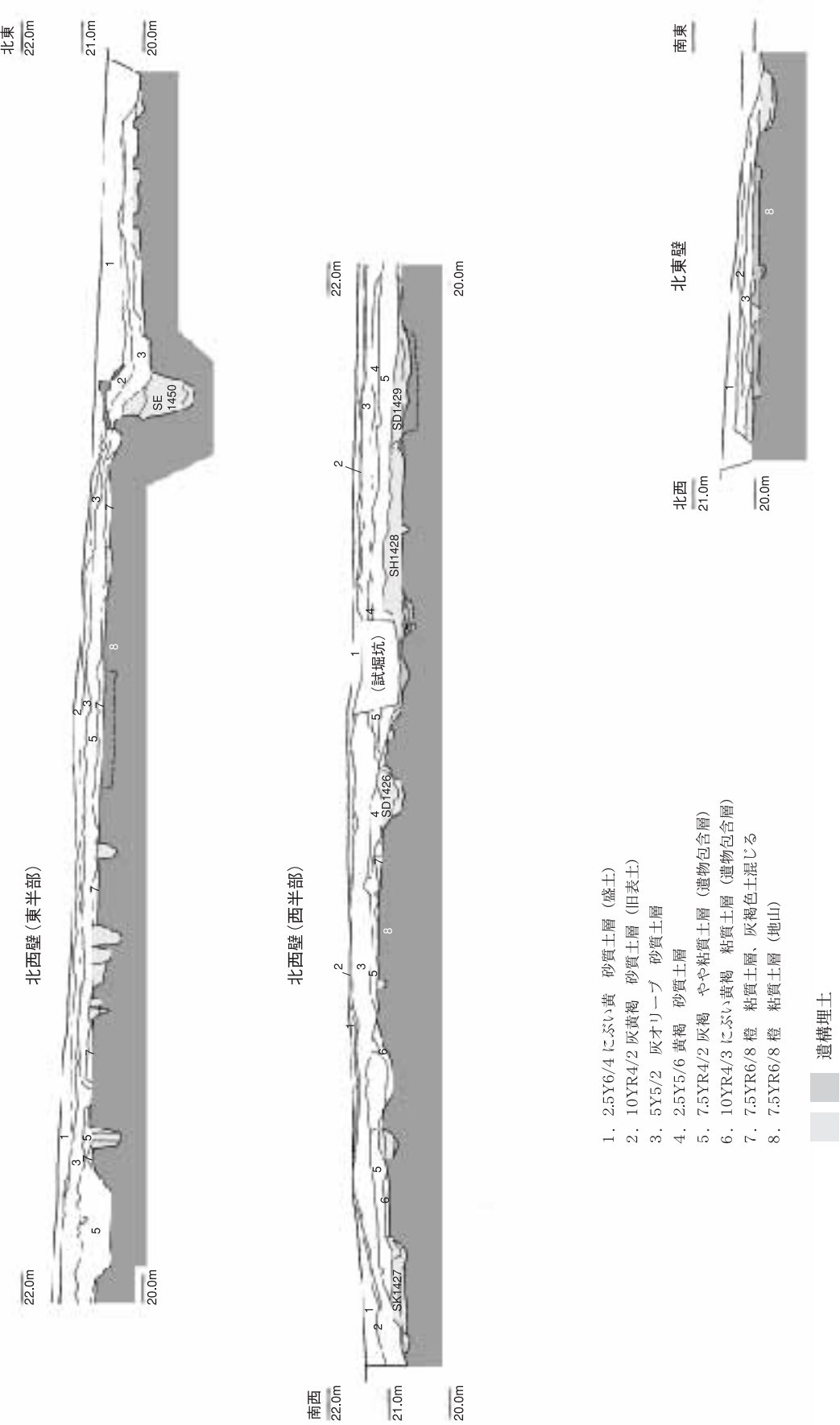


第3図 久留倍遺跡地形図（1：5,000）



第 4 図 遺構平面図 (1 : 200)

第5図 調査区土層図 (1 : 100)



の堆積土であろう。第5・6層は粘質土で遺物包含層である。調査区北東端部を除きほぼ見られる土層であるが、遺物量は少ない。弥生土器が多く、土師器、須恵器もある。第7層は明確な地山である第8層と分けたが、この上面が実際の遺構検出面である。遺物包含層である第5層の灰褐色粘質土が地山に染み込むような状況が見られ、第5層と第8層の間隔的な様相である。

北東端部ではSE1450を境に一段下がり、遺物包含層である第5・6層及び第7層が存在しないことから、遅くとも近世頃までには削平されたと考えられる。また南西端部は地形が下がり始めるところに当たる。

3. 遺構

第5次調査（G地区）の成果から、今回の調査区では中央部から南西部にかけて、多くの竪穴住居や古墳の周溝が検出されることを予想していたが、結果的には以外に遺構は少なかった。

確認した遺構の時期は、竪穴住居等、弥生時代に属するものが多い。古代の遺構は掘立柱建物と土坑、溝等であるが、官衙に関連するものかは不明である。中世の遺構は溝1条とわずかなピットのみで、包含層中にも全くと言っていいほど遺物はなかった。

全体として遺構の遺存状態は良好でなく、特に竪穴住居は全体を確認できたものがなく、多くが一部の周溝を検出したに止まる。土坑は平面形の整ったものが見られ、土坑墓の可能性はあるが、骨や副葬品が明瞭に確認できたものはない。ピットは数多く検出したが、掘立柱建物や柵列などにはほとんどまともならなかった。

（1）弥生時代

a. 竪穴住居

SH1403・1404・1406（第6図） 調査区が一段下がる北東端部で検出した。SH1403・1404は竪穴の掘り込みが明瞭で、調査区外へ住居が続いている。SH1406は南東部が後世の溝に削平され、検出した周溝は途切れており遺存状態はきわめて悪い。住居のおおよそ中央の位置で被熱の痕跡が見られ、

炉跡と考えられる。被熱の範囲は直径約0.3mである。SH1406に伴うと思われる支柱穴を4箇所確認した。

規模は、SH1406が4.6m×4.0m程度、SH1404が一辺3.8m程度、SH1403は不明である。SH1403がSH1404・1406をともにきっており、最も新しい住居と考えられる。住居の方向もSH1403のみ大きく異なるようである。SH1404とSH1406は直接切り合い関係がないが、ごく近接しており時期差が想定される。SH1404の方が深く掘り込まれている点がSH1403に共通することから、より新しいのではないかとと思われる。出土遺物は小片ばかりであるが、SH1403出土遺物には受口状口縁の壺が含まれていることから、これらの住居は中期後葉に属すると考えられる。

これらの住居の周辺で確認されたSD1408・1409といった細く浅い直線的な溝も、竪穴住居の周溝の可能性があろう。いずれからも土器の小片が出土している。

SH1415・1419・1421（第7図） 調査区の北東部で検出した。3棟いずれも北西隅から南西部の周溝を検出したにすぎない。住居の北東部から南東部はSK1414等後世に削平されたと考えられ確認できなかった。かろうじて南西側周溝と同一方向にはしるSD1418やSD1443といった溝が、住居の北東側周溝である可能性がある。ただし、これらがどの住居の周溝であるかは確定できない。SH1415と1421の南西側周溝は途中で重複し、そのまままっすぐ延びて調査区外へ続いている。

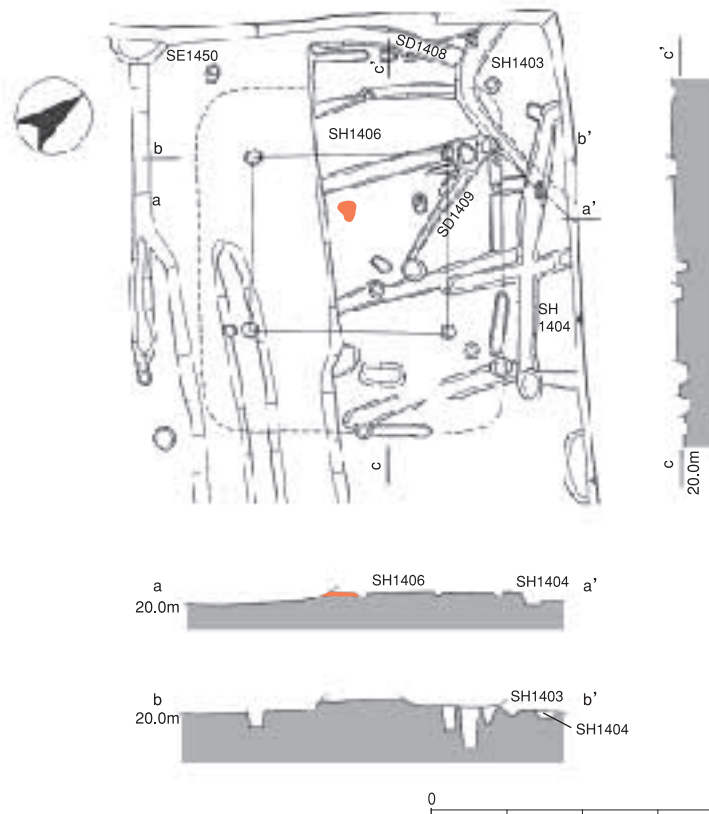
炉跡と思われる被熱の痕跡を1箇所確認した。直径約0.4mの範囲に焼土が散見された。支柱穴と推測されるピットは3箇所確認した。ただし、炉跡と支柱穴はどの住居に伴うものか不明である。

住居の規模はいずれも一辺4m程度と推測される。同一の場所で、住居の方向もほぼ同じであることからこれらは建て替えたものと考えられる。土層の観察からSH1415が最も新しい住居と思われるが、SH1419とSH1421の新旧は不明である。出土遺物がわずかで確定しがたいが、中期後葉の住居であろう。

SD1425はSH1415かSH1419の南東周溝であるかもしれない。弥生土器の小片が出土している。

SH1428（第8図） 調査区の南西部に位置する。

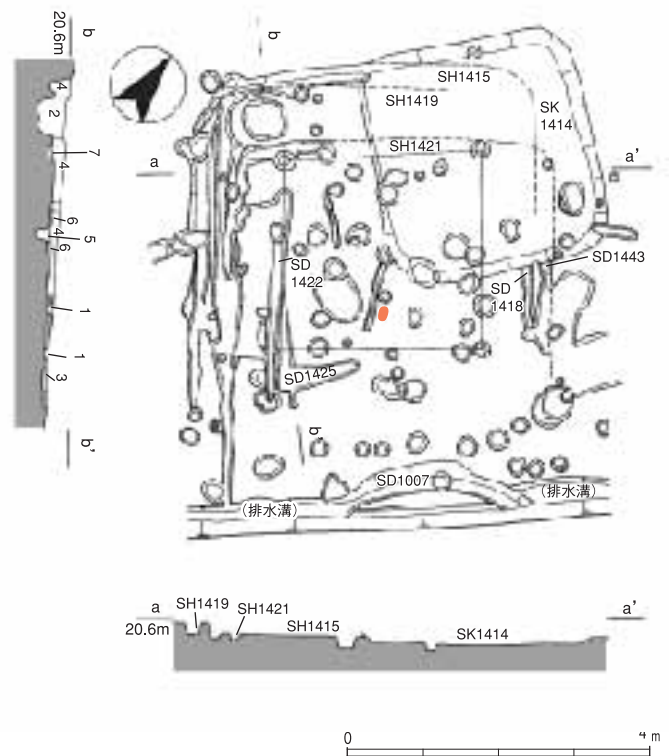
※赤色箇所は被熱の痕跡



第 6 図 SH1403・1404・1406 実測図 (1 : 100)

※赤色箇所は被熱の痕跡

1. (新しいピット埋土)
2. 10YR5/2 灰黄褐 やや粘質土層、橙色土含む
(SB1451P1埋土)
3. 2.5Y5/3 黄褐 やや粘質土層
(土坑埋土)
4. 10YR4/3 にぶい黄褐 やや粘質土層
(SH1415埋土)
5. 10YR5/4 にぶい黄褐 やや粘質土層
(ピット埋土)
6. 10YR4/4 褐 やや粘質土層
(SD1422埋土)
7. 7.5YR5/2 灰褐 やや粘質土層、炭化物含む
(SH1421周溝埋土)



第 7 図 SH1415・1419・1421 実測図 (1 : 100)

北西隅から南西側周溝を検出し、北東側はSD1432をSH1428の周溝と推定した。炉跡は不明で、支柱穴は該当するようなピットを特定できなかった。住居の規模は北西から南東方向で5.7m、南西から北東方向で5.4mである。

北西隅の埋土中から多くの土器が出土した。凹線文が施された受口状の壺等、中期後葉の弥生土器がみられ、この時期の住居であろう。

住居内の北西部で、SH1428に伴うものか明確ではないが、SH1428の埋土の下からSK1437を検出した。調査区外へ続くため全形は不明であるが、長さ0.68m以上、最大幅0.93m、深さ0.20mを測る。底は緩やかに丸みを帯び、すり鉢状である。埋土下位に厚さ約0.1mの炭化物の層が明瞭に存在した。土坑内が被熱した痕跡はなく、炭化物を故意に埋めたと考えられる。祭祀行為を示すような遺物はなく、弥生土器の小片が出土した程度である。

SH1428に重複する住居ははっきりしないが、SD1444は北西端が弧を描いていることから住居の周溝であるかもしれない。切り合い関係からSD1444の方がSH1428より古い。

SH1441 調査区の南西端部で、住居の北東隅部分のみを検出した。隣接するG地区では同一住居

と思われる遺構が不明瞭なため、全体の規模等、詳細は不明である。詳しい時期は判断し難いが、埋土から弥生土器が出土している。

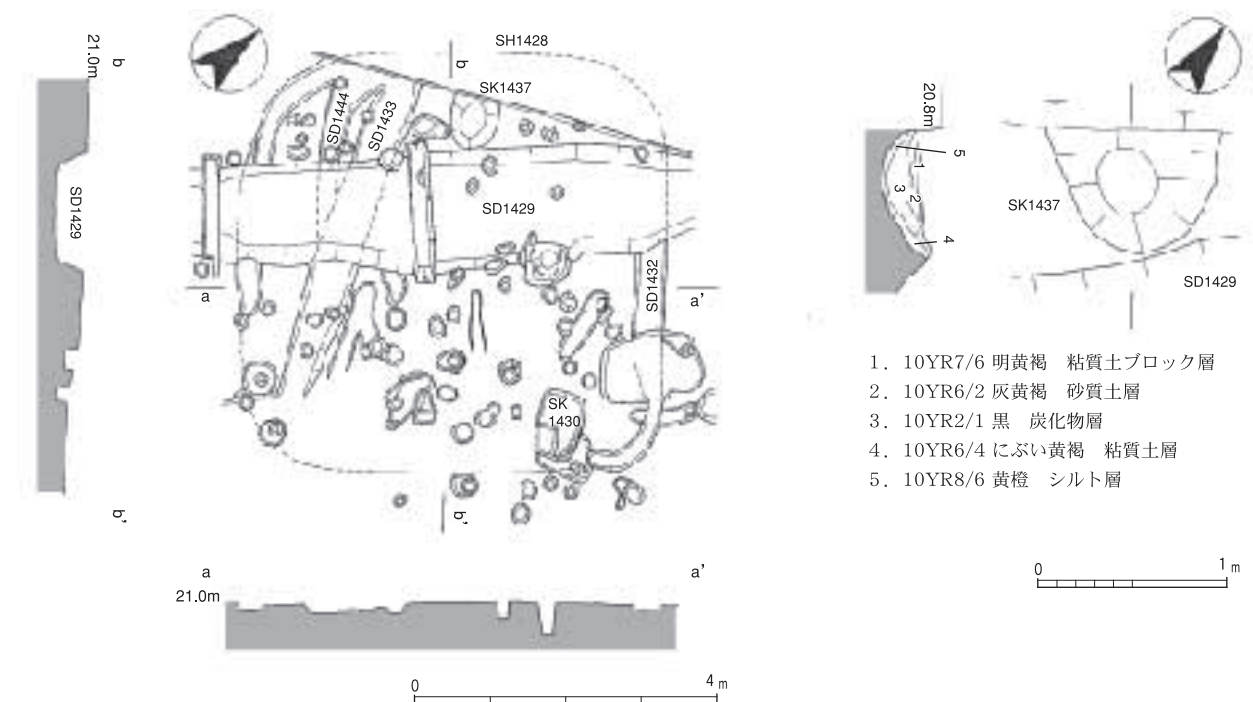
SH1441の北東側には平行にはしるSD1438とSD1447を検出したが、これらも規模からみて住居の周溝の可能性が高い。

SH1448 調査区の南西部で、住居の南東隅部分の周溝を検出した。ごく一部しか検出していない上、SD1426によってきられているため非常に不明瞭ではあるが、細く浅い溝がほぼ直角に屈曲していることから住居の周溝と推定した。竪穴の掘り込みはみられず、出土遺物もない。

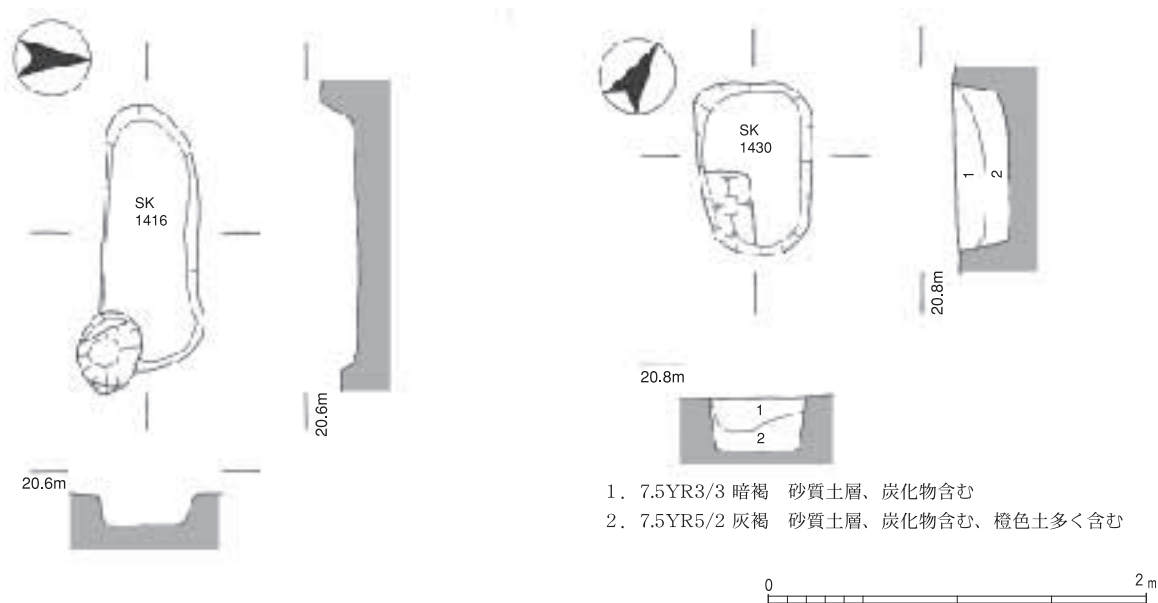
b. 土坑

SK1416 (第9図) 調査区の中央部で検出した隅丸長方形の土坑である。長軸方向がほぼ東西を向く。床面は平坦である。埋土は灰褐色砂質土で、弥生土器の小片が出土した。規模、形状から土坑墓の可能性があろう。

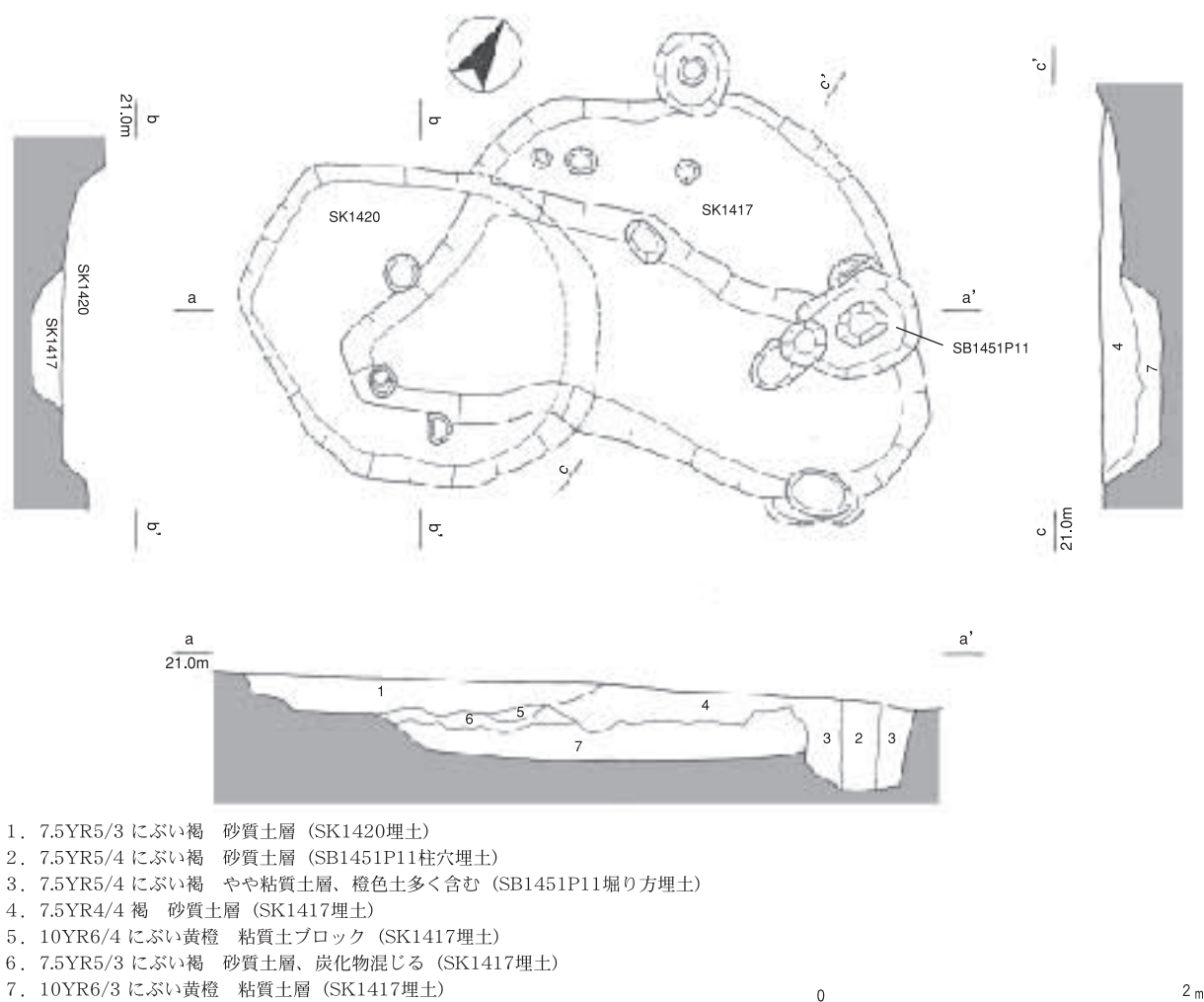
SK1417 (第10図) 調査区の中央部で検出した大きな不定形の土坑である。北半分がテラス状に一段高い平坦面をなしており、掘削の時期が上段と下段で分かれるのかもしれない。下段は幅1.2mで長方形を呈する。比較的多くの弥生土器が出土してお



第8図 SH1428、SK1437 実測図 (SH1428は1:100、SK1437は1:40)



第9図 SK1416、SK1430 実測図 (1 : 40)



第10図 SK1417・1420 実測図 (1 : 40)

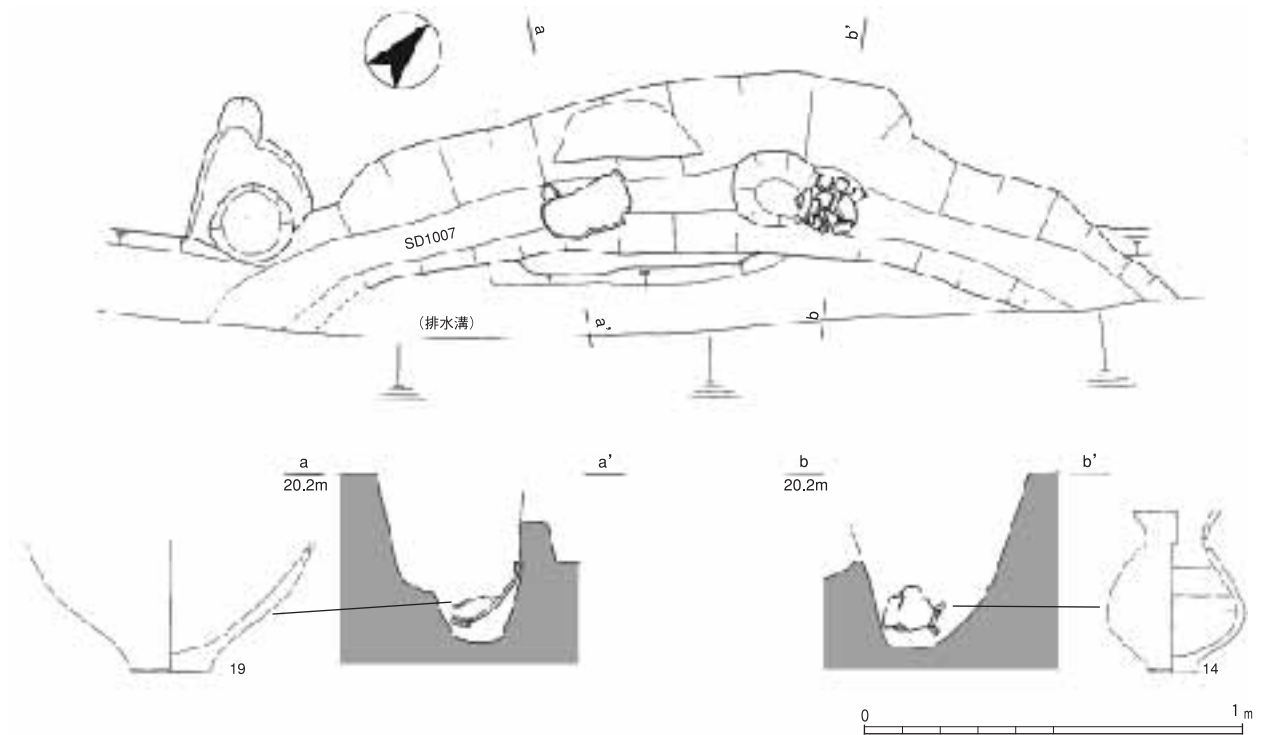
り、凹線文のある壺や台付甕がみられ、中期後葉の土坑と考えられる。ただし、上段の埋土からは古墳時代の土師器や須恵器もわずかに含まれていた。

SK1427 調査区の南西端部で検出した落ち込みである。壁際に住居の周溝状の土層を確認したが、明瞭でない。南接するG地区で同一視できる遺構はない。埋土からは弥生土器、古墳時代の須恵器が出土している。

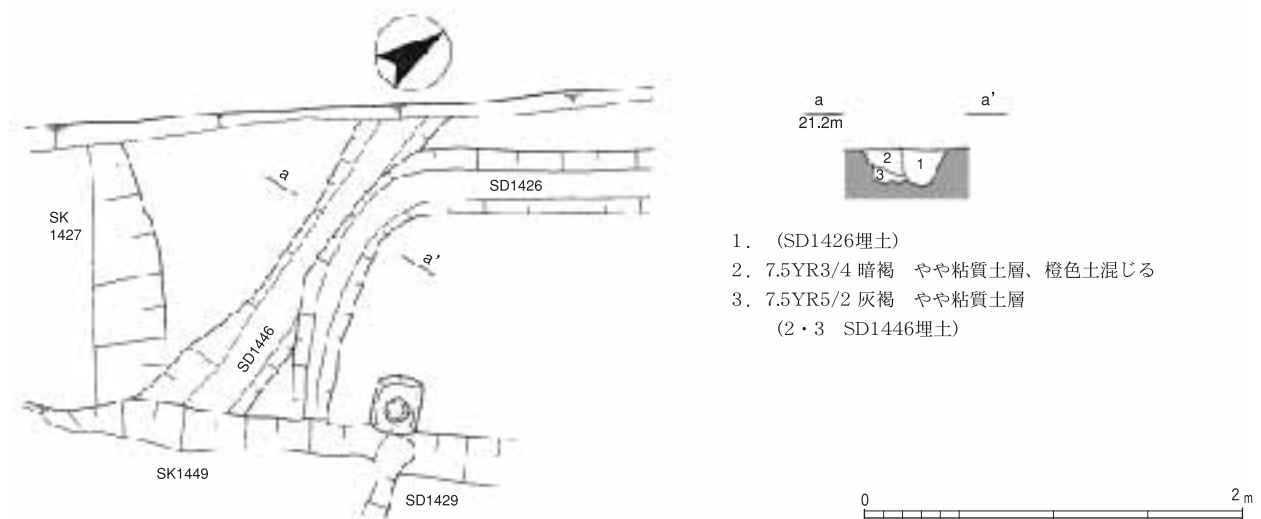
SK1430 (第9図) 調査区の南西部で検出し、

SH1428と重複する。長軸方向は地山が傾斜する方向である。平面形は比較的整った隅丸長方形をなす。埋土は上下2層に分かれ、いずれにも炭化物が少し混じり、弥生土器が出土している。

SK1449 調査区の南西端部、SK1427の東側で検出した落ち込みである。平面形状から竪穴住居の一角かと思われたが、周溝は確認されなかった。G地区との関連ではSH1034と同一である可能性が高いが、こちらは周溝が存在している。切り合い関



第11図 SD1007 遺物出土状況実測図 (1 : 20)



第12図 SD1426・1446 実測図 (1 : 40)

1. (SD1426埋土)
 2. 7.5YR3/4 暗褐 やや粘質土層、橙色土混じる
 3. 7.5YR5/2 灰褐 やや粘質土層
- (2・3 SD1446埋土)

係から、SH1441より新しく、SD1446より古いと思われる。埋土からは凹線文のある弥生土器の壺が出土している。

c. 溝

SD1007（第11図） 調査区の北東部の壁際で検出した。北西に膨らむ弧状を呈し、溝の両端はG地区へ続く。G地区で検出されたSD1007とSD1010を繋ぐ溝であることから、遺構番号をSD1007とした。

規模は、一部膨らむが幅約0.30mで、今回の調査による検出長は約2.3mであるが、G地区を含めると20m以上に及ぶ。断面がU字状で深く掘削されている。底面のレベルは起伏があるが、概ね南西から北東に傾き、調査区の北東方向にある東流する小谷（C地区からG地区にかけて検出されたSR578）に至ると思われる。

溝の底から、弥生土器の壺（14）や甕（19）が出土した。壺は口縁を西に向け横に倒れた状態で、少し歪んで潰れていた。この他一定量の遺物があるが、G地区からは有溝石錘が出土しているのみで時期を判断できる遺物がなかったという。今回の出土遺物から、SD1007は後期前葉の溝と考えられる。

SD1433（第8図） 調査区の南西部、SH1428に重複する溝である。切り合い関係からSH1428より新しい。北西から南東へ直線的にはしり、長さは4.5m以上である。幅が0.60mあり、住居外の排水溝としては広すぎるであろうか。埋土から弥生土器の台付甕が出土している。

SD1446（第12図） 調査区の南西端部で検出した。北西の調査区外から南南東へ向かって延びるが、SD1429等に削平されG地区まで続かない。断面逆台形を呈し、形状、規模からは住居外の排水溝が想定される。出土遺物には弥生土器の受口状口縁の甕や高杯があり、後期前葉のものと思われる。

（2）古代

a. 掘立柱建物

SB1451（第13・14図） 調査区の中央部で、両側の桁行方向のみ確認した。北西側の梁行柱列が未調査で全長は不明であるが、検出した範囲では桁行が5間で12.60m、梁行が3間で6.00mである。桁行が1間2.52m、梁行が1間2.00mで、梁行はほぼ

等間に柱掘り方が位置するが、桁行は柱掘り方のP10とP11の間隔がやや長い。棟方向は真北に対し60°西に振る。SB1451の北西方向に位置する正倉院の区画溝SD899に直交する角度である点は興味が持たれるが、時期は合わない。

掘り方は多くが円形で、直径0.4～0.7mで、およそ0.5m程度である。P1のみやや方形を呈する。柱痕跡は3箇所を確認し、直径はP2とP11が0.20m、P12が0.15mである。

SB1451から出土する遺物は弥生土器片がほとんどであるが、P2の柱痕跡の埋土中位から土師器の甕が出土した。平安時代後期のものと思われる、SB1451はこの時期の建物と考えられる。

b. 土坑

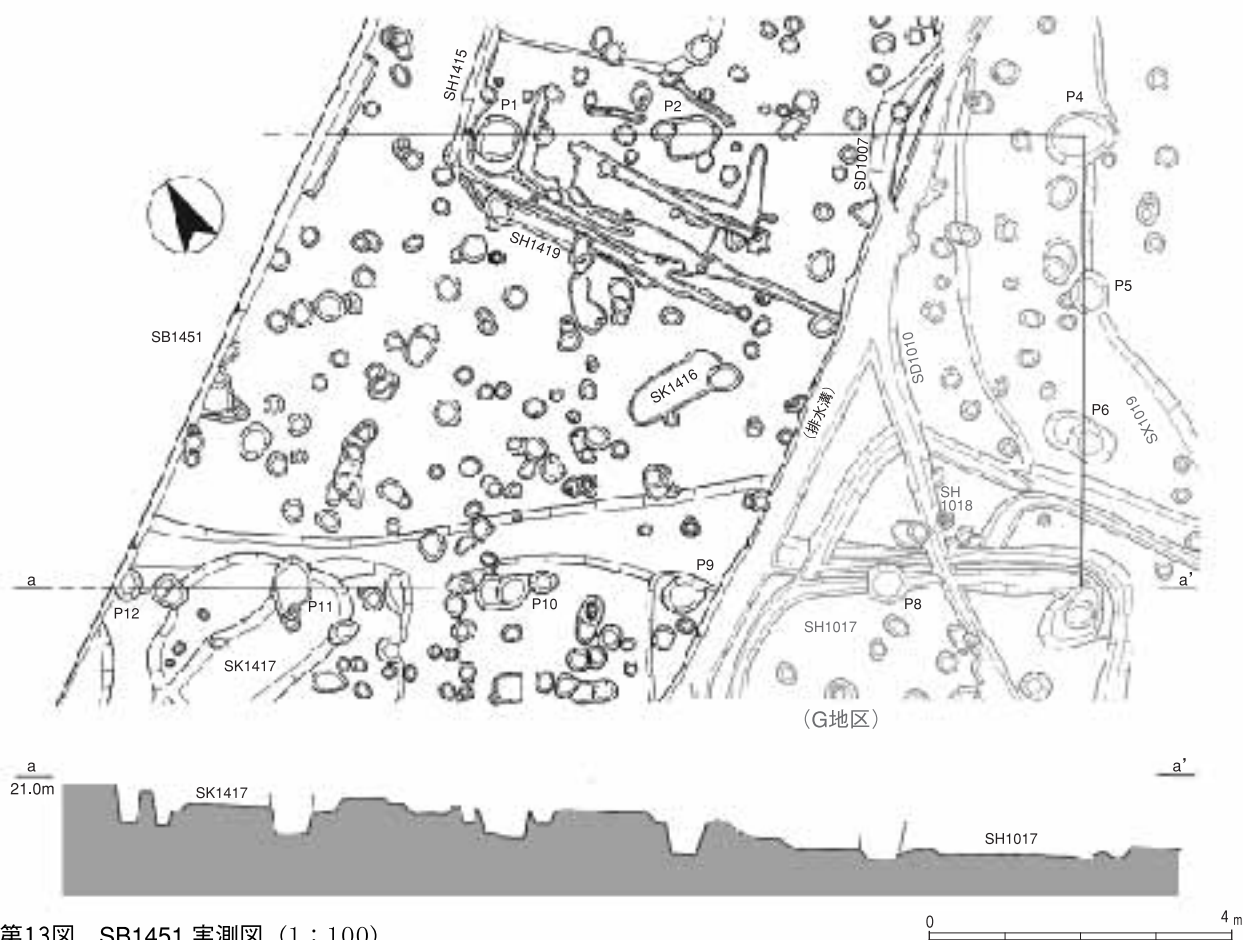
SK1414（第15図） 調査区の北東部で検出した。平面形は隅丸正方形で、床面のレベルはおおよそ等しく、平坦である。掘り込みは地山の標高が高い北西で深く、0.15mである。南西側の壁際に狭いテラス状の高まりがみられた。遺物は弥生土器、須恵器、土師器等が出土しているがごく少ない。平安時代から中世の時期の土坑であろう。

SK1420（第10図） 調査区の中央部で検出した卵形の円形の土坑である。浅く、壁が皿状に緩やかに傾斜する。出土遺物は弥生土器、須恵器、灰釉陶器等がみられ、平安時代前期の土坑と思われる。

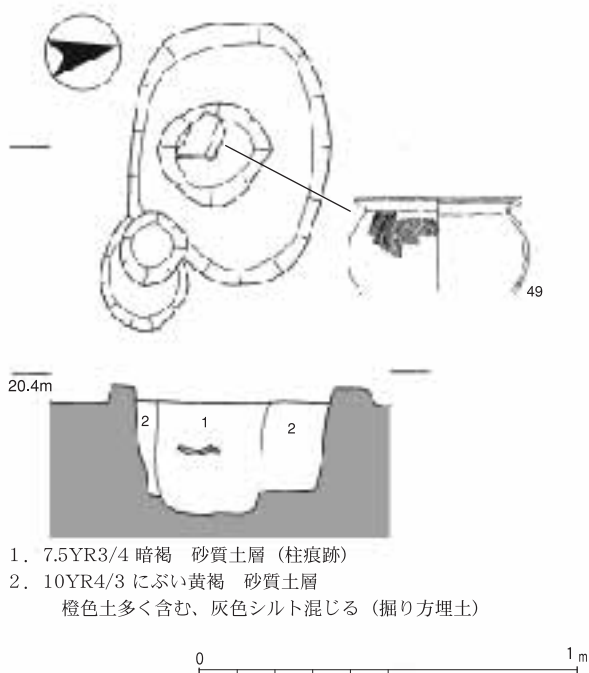
c. 溝

SD1429（第4・16図） 調査区の中央部から南西部にかけて検出した幅の広い直線的な溝である。等高線に平行する方向にはしり、床面はおおよそ平坦で、レベルは一定である。溝の両端は未確認であるが、遺跡が所在する丘陵に小さく入り込んだ谷と谷を結び、丘陵を横断するような溝であるかもしれない。断面が逆台形を呈し、幅は上面で1.55m、床面で1.0mである。埋土第1層は軟らかく、遺物が多く含まれていたのに対し、第2層以下は良く締まり、ほとんど遺物はなかったことから、第2層以下は故意に埋めた可能性がある。

出土遺物のほとんどが弥生土器であるが、古墳時代から奈良時代の須恵器も若干みられ、埋没したのは古墳時代以降と考えられる。



第13図 SB1451 実測図 (1 : 100)



1. 7.5YR3/4 暗褐 砂質土層 (柱痕跡)
2. 10YR4/3 にぶい黄褐 砂質土層
橙色土多く含む、灰色シルト混じる (掘り方埋土)

第14図 SB1451P2 遺物出土状況実測図 (1 : 20)

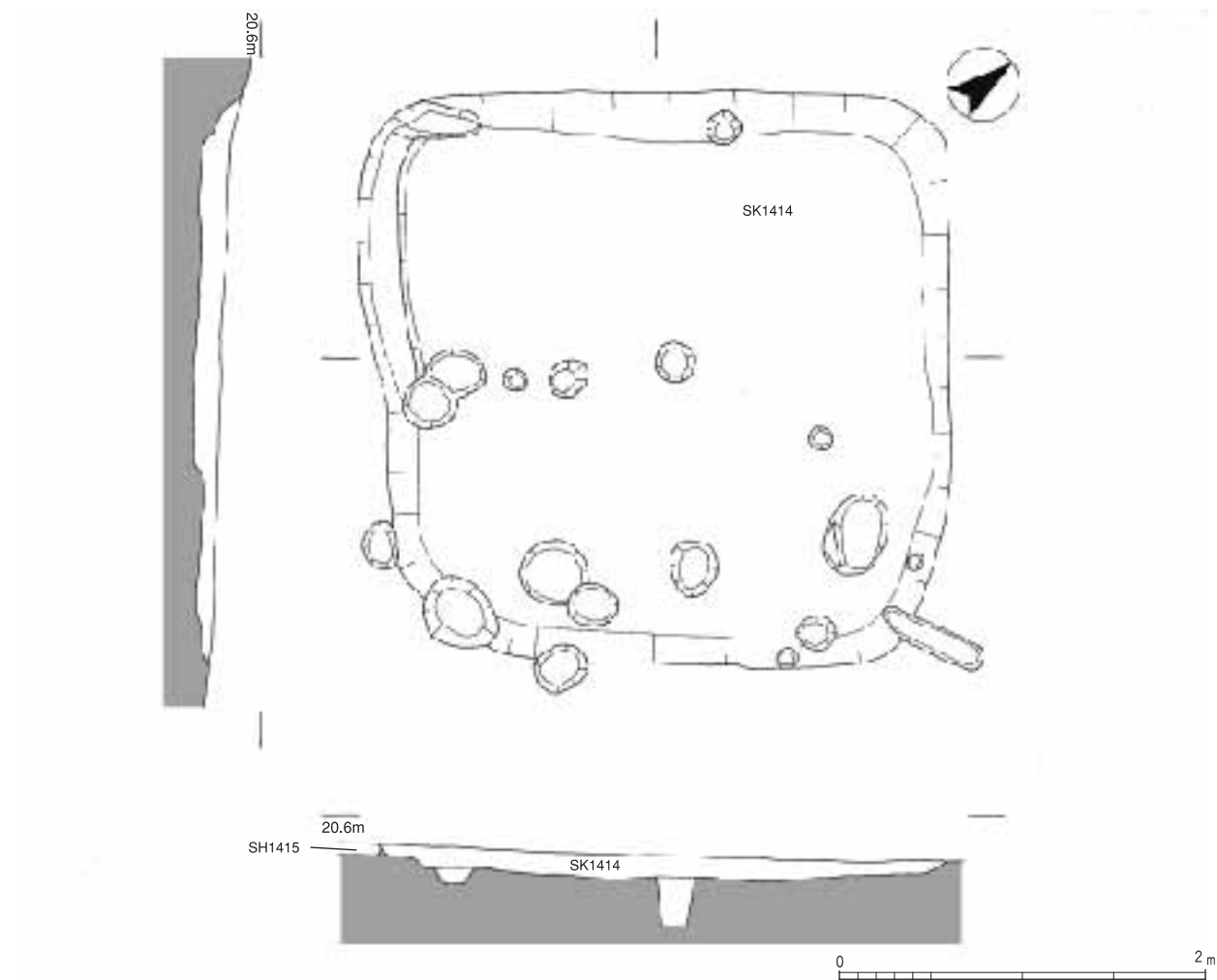
(3) 中世

a. 溝

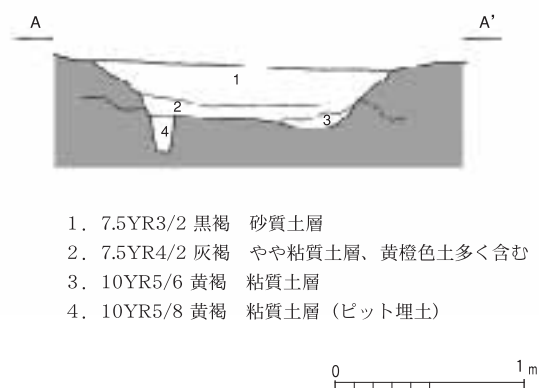
SD1426 (第12・17図) 調査区の南西部で検出した。等高線に平行する方向で直線的に伸び、南西端で丸みを帯びながらほぼ直角方向に曲がる。南東方向に伸びて、その先は一段下がるため確認されなかった。ほぼ均一に断面U字形をなし、底面は全体的に同レベルを保つ。

北東端から約3.5mの間に多量の礫と遺物が含まれていた。20cm以下の大きさの礫で、使用痕もなく特徴はない。遺物は山茶碗、土師器、須恵器で、完形のものはなく、出土状況から見て、礫と遺物を一緒に溝に廃棄したと考えられる。埋土もほとんど黒褐色砂質土で、一気に埋まったと思われる。

日常雑器が捨てられていることや溝の形状から、区画された内側に住居跡等の存在が考えられるが、確認した同時期の遺構は土師器小皿が出土したピッ



第15図 SK1414 実測図 (1 : 40)



1. 7.5YR3/2 黒褐 砂質土層
2. 7.5YR4/2 灰褐 やや粘質土層、黄橙色土多く含む
3. 10YR5/6 黄褐 粘質土層
4. 10YR5/8 黄褐 粘質土層 (ピット埋土)

第16図 SD1429 埋土土層図 (1 : 40)

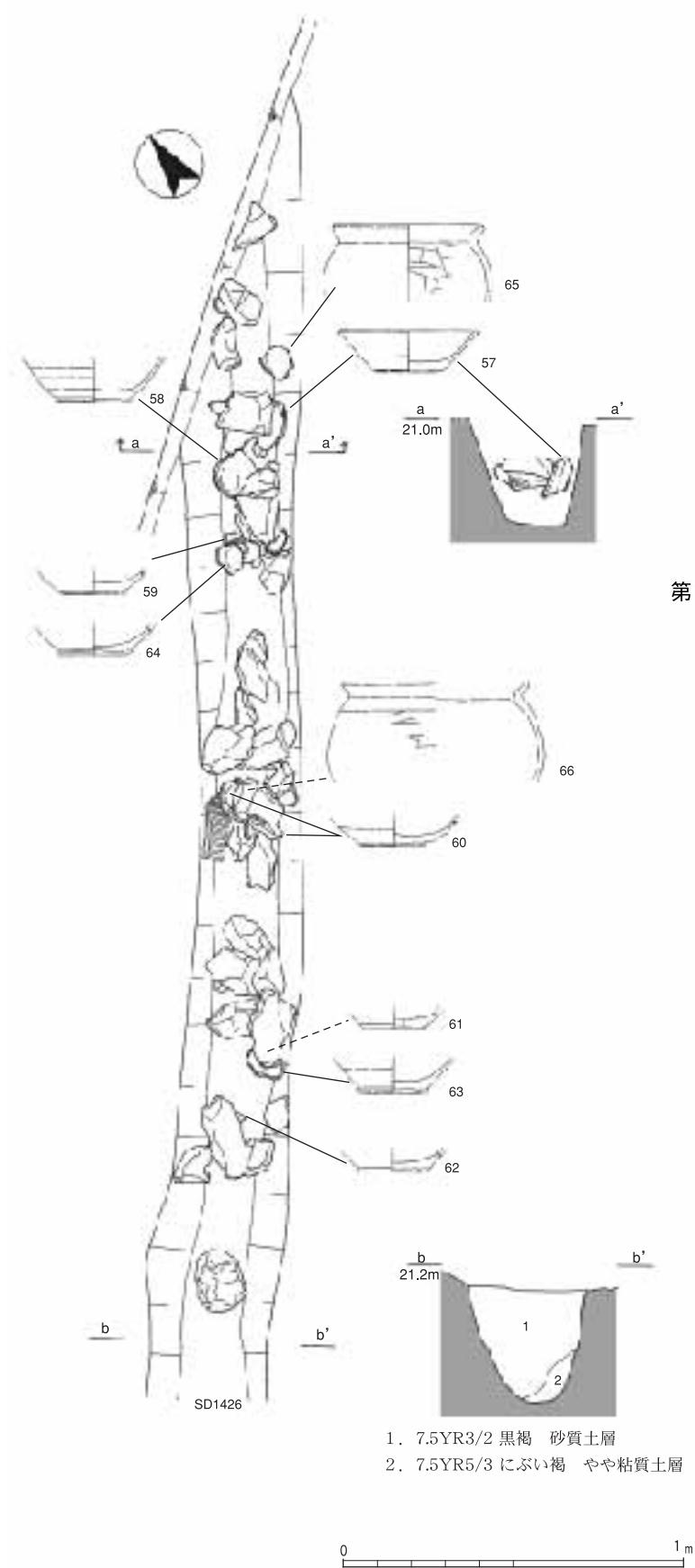
ト1箇所だけであった。溝の時期は、山茶碗の型式から中世前期であろう。

b. ピット

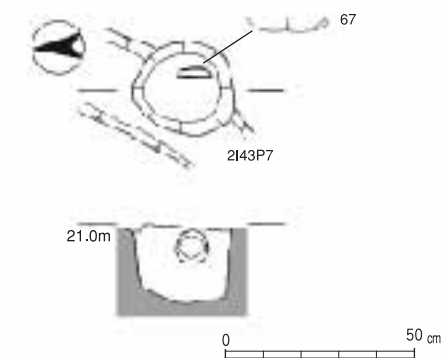
2I43P7 (第18図) 調査区の南西部、SD1426の南東側で検出した小さなピットである。直径0.25m、深さは0.20mで、埋土上位から土師器小皿がほぼ完形で出土した。小皿は真横に立った状態であった。SD1426と同様の時期と思われる。

c. 井戸

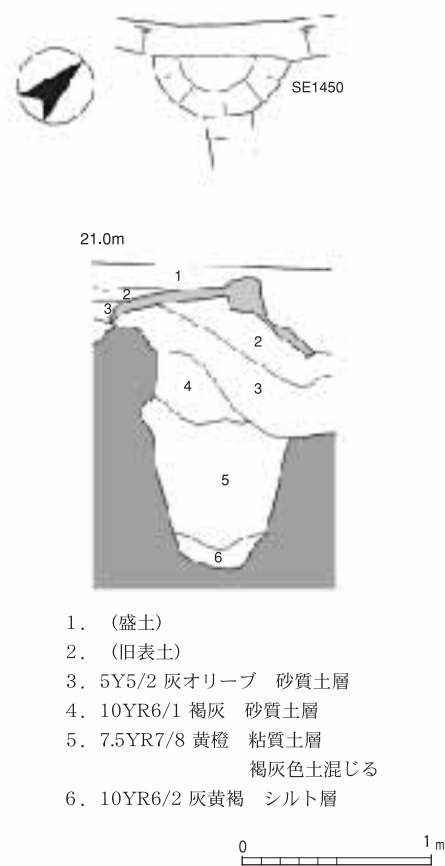
SE1450 (第19図) 時期不明であるが、ここで述べる。調査区の北東部の遺構検出面が一段下がるちょうど境に位置する。調査区の壁際で、井戸の南東部のおおよそ1/2を検出した。素掘りで、推定の直径は0.75m、深さは1.15mであった。底の井桁等は特に確認されなかった。出土遺物は全くない。



第17図 SD1426 遺物等出土状況実測図 (1 : 20)



第18図 2I43P7 遺物出土状況実測図 (1 : 20)



第19図 SE1450 実測図 (1 : 40)

第1表 遺構一覧表

竪穴住居

遺構番号	挿図番号	検出規模(m)			主軸(タテ) 方向	炉	時期	備考
		タテ×ヨコ	深さ	面積(m ²)				
SH1403	第6図	不明	0.10	不明	(N11° W)	—	弥生時代中期後葉	南西隅を検出
SH1404	第6図	タテ3.8	0.14	不明	N49° W	—	弥生時代中期後葉	南西部を検出
SH1406	第6図	4.6×(4.0か)	—	(18.4か)	N53° W	中央	弥生時代中期後葉	南西以外の周溝検出
SH1415	第7図	ヨコ4.2か	0.23	17.64か	N39° W	不明	弥生時代中期後葉	南西部を検出
SH1419	第7図	ヨコ4.0か		不明	N36° W	不明	弥生時代中期後葉	南西周溝検出
SH1421	第7図	ヨコ4.2か	—	不明	N35° W	—	弥生時代中期後葉	北西・南西の周溝検出
SH1428	第8図	5.7×5.4か	0.13	30.78か	N47° W	不明	弥生時代中期後葉	SD1432は北東周溝か
SH1441	—	不明	0.14	不明	N54° W	—	弥生時代	北東隅を検出
SH1448	—	不明	—	不明	(N24° W)	—	弥生時代か	南東隅を検出

掘立柱建物

遺構番号	挿図番号	桁行 (間)	梁行 (間)	面積(m ²)	棟方向	時期	備考
		(m)	(m)				
		柱間(m)	柱間(m)				
SB1451	第13・14図	5以上	3	75.6以上	N60° W	平安時代後期	G地区に続く
		12.60	6.00				
		2.30～2.75	2.00				

土杭

遺構番号	挿図番号	形状	規模(m)			長軸方向	時期	備考
			長軸	短軸	深さ			
SK1414	第15図	隅丸方形	3.12	3.12	0.15	N52° W	平安時代～中世	SH1415をきる
SK1416	第9図	隅丸長方形	1.40	0.50	0.16	N88° E	弥生時代	ほぼ東西軸
SK1417	第10図	不定形	2.80	1.96	0.33	N80° E	弥生時代中期後葉	2段に掘り込む
SK1420	第10図	楕円形	2.00	1.75	0.20	N90° W	平安時代前期	
SK1427	—	不明	—	—	0.26	不明	弥生時代か	部分検出
SK1430	第9図	隅丸長方形	0.90	0.60	0.28	N32° W	弥生時代	
SK1437	第8図	楕円形か	0.68以上	0.93	0.20	(N37° W)	弥生時代	SH1428に伴うものか
SK1449	—	隅丸方形か	—	—	0.50	不明	弥生時代中期後葉	SH1034の北隅か

溝

遺構番号	挿図番号	規模(m)			方向	時期	備考
		長さ	幅	深さ			
SD1007	第11図	2.3以上	0.30	0.46	(弧状)	弥生時代後期前葉	SD1010とつながる
SD1408	第6図	2.0以上	0.26	0.06	N47° E	弥生時代か	SH周溝か
SD1409	第6図	1.7以上	0.14	0.04	N17° E	弥生時代か	SH周溝か
SD1418	第7図	0.8以上	0.14	0.03	N37° W	弥生時代	SH1415の北東周溝か
SD1422	第7図	2.7	0.20	0.08	N33° W	弥生時代	SH周溝か
SD1425	第7図	1.45	0.30	0.05～0.14	N49° E	弥生時代	SH1415かSH1419の南東周溝か
SD1426	第12・17図	7.0以上	0.33	0.32	N38° E	鎌倉時代	断面U字形
SD1429	第16図	16.0以上	1.55	0.30	N39° E	古墳時代～古代	
SD1432	第8図	3.0以上	0.25～0.38	0.10	(弧状)	弥生時代	SH1428の北東周溝であろう
SD1433	第8図	4.5以上	0.60	0.15	N31° W	弥生時代	
SD1438	—	2.1以上	0.17	0.05	N54° W	弥生時代	SH周溝か
SD1443	第7図	1.0以上	0.18	0.03	N36° W	弥生時代	SH1421の北東周溝か
SD1444	第8図	2.5以上	0.26	0.09～0.18	(弧状)	弥生時代	SHの南西周溝か
SD1446	第13図	2.0以上	0.35	0.19	N20° W	弥生時代後期前葉	住居外排水溝か
SD1447	—	1.9以上	0.20	0.06	N54° W	弥生時代	SH周溝か

4. 遺物

今回の調査で出土した遺物は弥生土器が多くを占める。古墳時代、奈良時代の須恵器がわずかにみられ、平安時代の灰釉陶器、土師器、中世の山茶碗等が一定量ある。総出土量は遺物整理箱に約14箱分である。

(1) 弥生時代

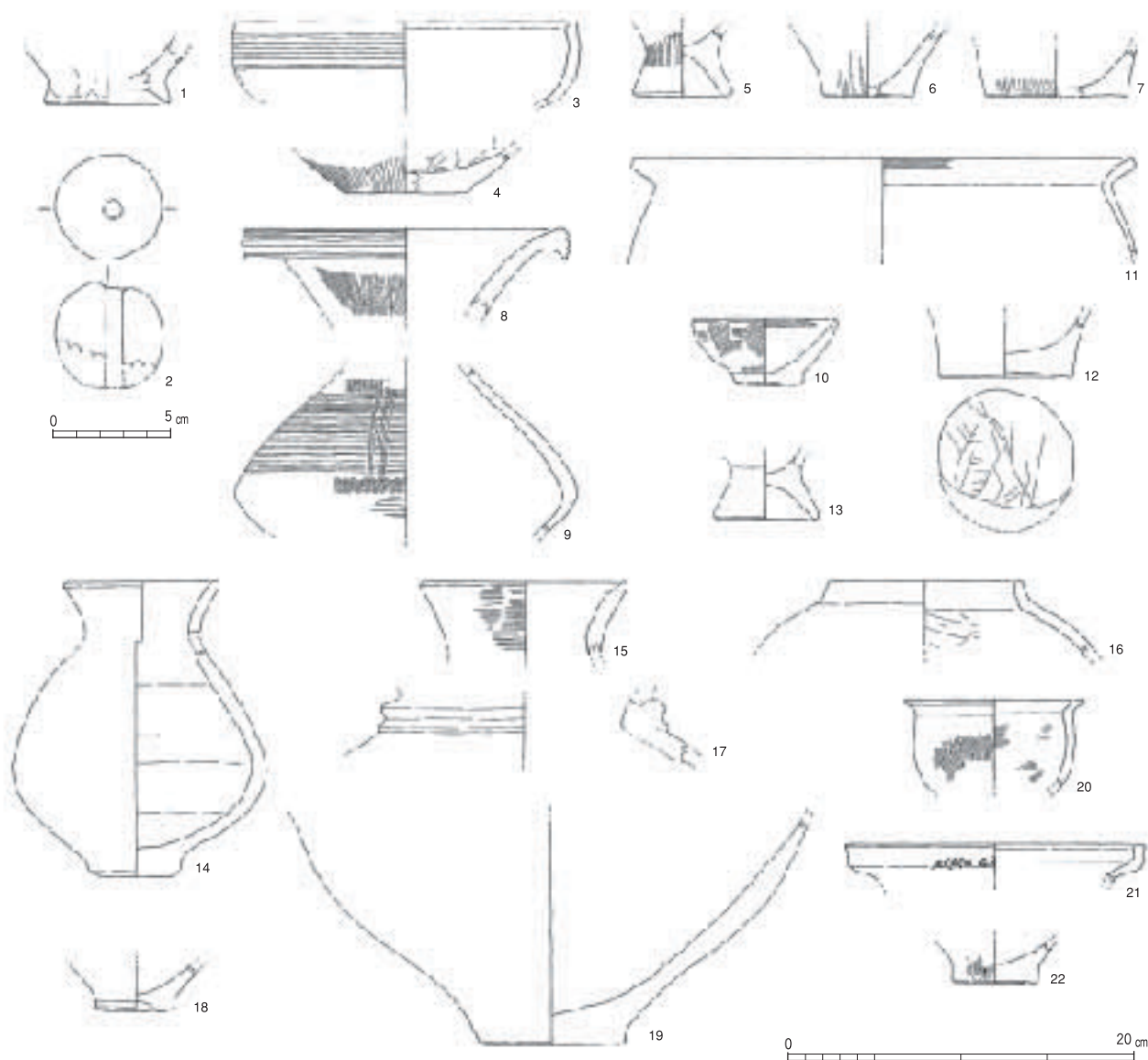
遺構出土のものは、遺構の遺存状況が良くないため量的にまとまっていない。また、全体に土器の残存状態が悪く、実測できるものが限られる。特に竖穴住居からの出土遺物は貧弱である。

遺物の時期は中期後葉のものが多く、後期までみられる。

SH1415出土遺物 (第20図1・2) 1は甕の底部で、やや台状に底面をくぼませる。2の土製品は全体が黒褐色を呈し、直径4.5cmで比較的大きな丸玉である。

SH1428出土遺物 (第20図3～5) 3・4は壺である。3はやや内湾する受口の口縁部に凹線文が5条施されている。4には底面にもハケメが見られる。5は台付甕の底部である。これらは中期後葉のものであろう。

SH1441出土遺物 (第20図6・7) とともに平底



第20図 出土遺物実測図① (1:4, 2は1:3)

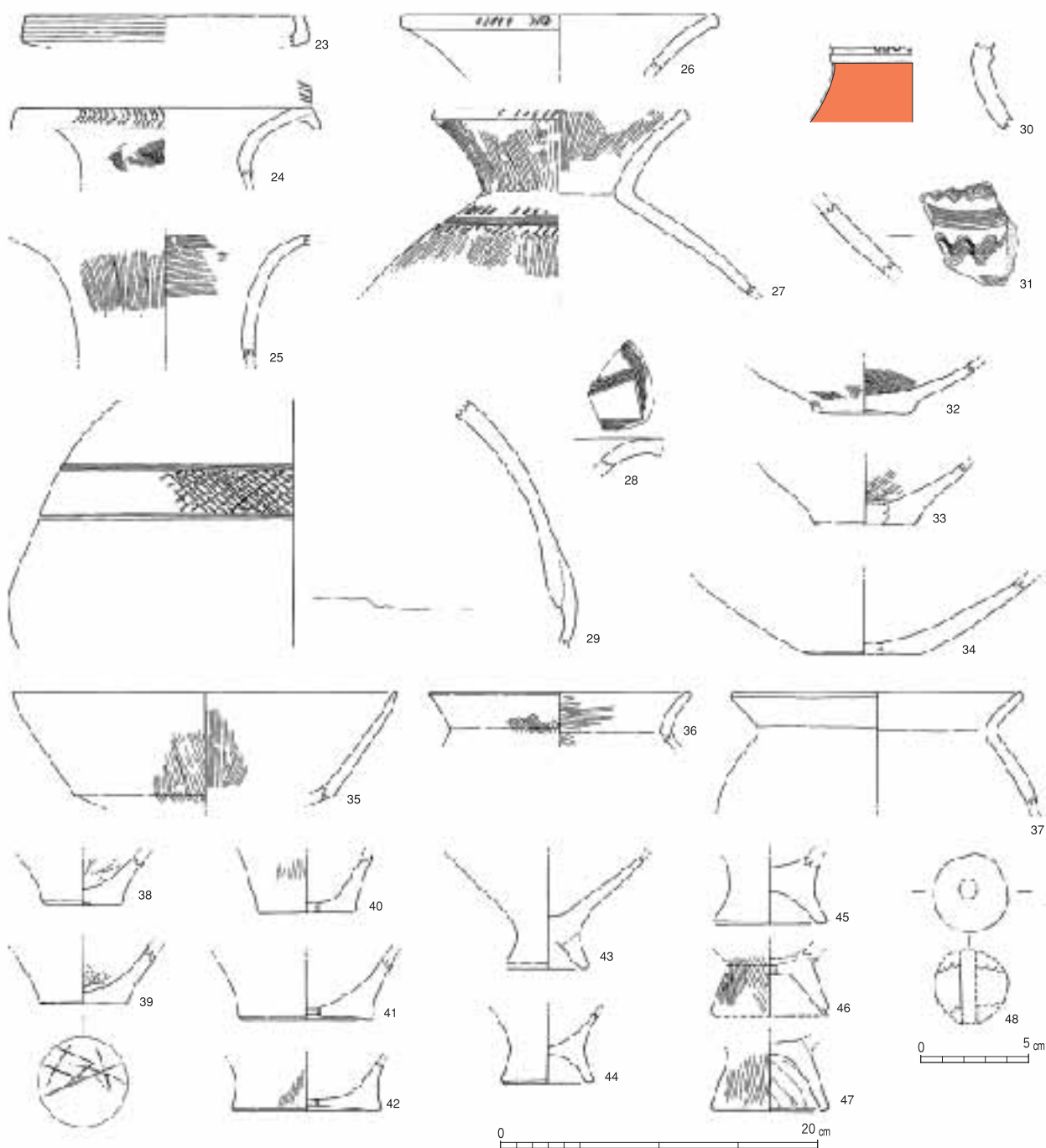
1・2: SH1415、3～5: SH1428、6・7: SH1441、8～13: SK1417、14～22: SD1007

の甕である。6の底面には板圧痕が見られる。

SK1417出土遺物（第20図8～13） 8は広口壺の口縁部で、肥厚する口縁端部に凹線文が4条施されている。9は算盤玉を呈する壺の体部である。外面には、上から簾状文、横直線文、波状文の櫛描文様が施され、横直線文上には縦の櫛描直線文が重ねられている。10は手捏ねの小型の鉢で、底部はやや柱状に立ち、底面がややくぼむ。内面には口縁部にのみ横方向のハケが施される。11は甕の口縁部、

12・13は甕の底部である。12は底面がややくぼむ平底で、葉脈痕が残る。これらの時期は概ね中期後葉に収まるものであろう。

SD1007出土遺物（第20図14～22） 14・15は外反してやや開く口縁を有する壺である。14は、遺存状態は悪いが文様は見られず、底部は柱状を呈する。15の内面には横方向のハケメが見られる。16はごく短い口縁部を有する壺である。17の壺は頸部に突帯を貼り付けている。18は凹状を呈する



第21図 出土遺物実測図②（1：4、48は1：3） 23～48：包含層等

壺の底部である。19は壺の下半部で、外面はミガキが施されていると思われる。

20は短く外反して開く口縁を有する鉢で、内外面に細かいハケメが見られる。21は近江系の受口状口縁の甕である。外面に櫛刺突列点文が施される。胎土は微小な砂粒を非常に多く含む特徴的である。22は平底の甕である。

SD1007出土遺物は、およそ後期前葉に収まると考えられる。

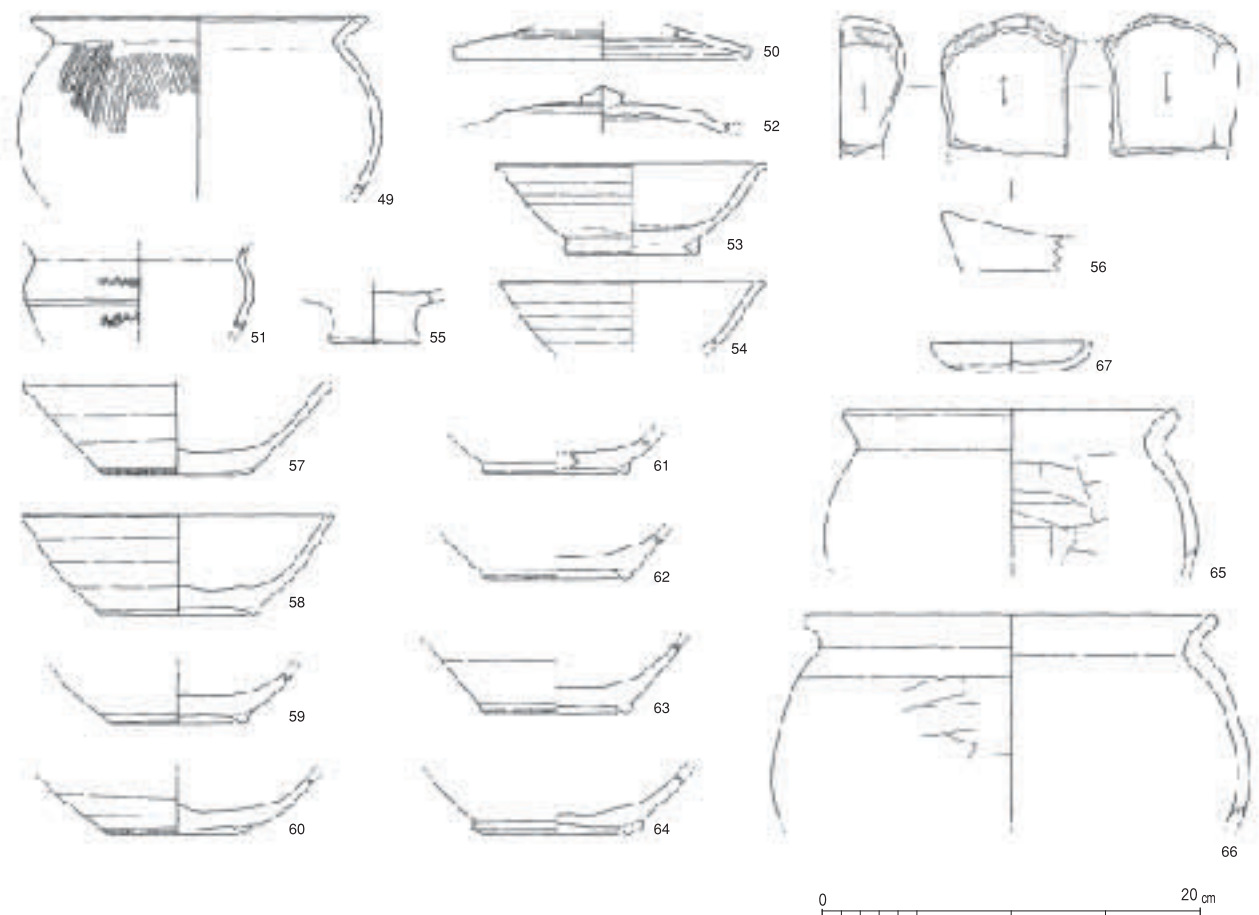
包含層等出土遺物（第21図23～48） 23は口縁部に3条の凹線文が施された受口状口縁壺で、中期後葉のものである。24～28は広口の壺である。24は口縁端部を垂下させるタイプで、25も同様のものと思われる。24の口縁端部には羽状文が、内面には斜行の刺突文が見られる。25の頸部外面にはミガキが施され、内面は横方向のハケ調整がされている。26の口縁端部には竹管文と斜行の刺突文が見られる。27は、口縁端部に櫛刺突文が、口縁部から頸部の内外面にはミガキが施されている。肩部

は、櫛刺突文を施した後、その中央に櫛描直線文をいれている。体部外面はミガキである。26・27は後期前葉のものと考えられる。28の口縁部内面には、縦に櫛描直線文を施した後、外周にハケメ様の櫛描直線文を重ねている。

29の壺の体部片は三河地域からの搬入品と思われ、ヘラ描きの斜格子文の上下に2条の櫛描直線文を体部上半に施している。色調、胎土も特徴的で、全体に褐色を帯びるが部分的には橙色が見られ、大きめの砂粒を含む。いわゆる長床式といわれるもので、中期後葉のものであろう。壺の頸部付近である30は、突帯が貼り付けられ、くぼませた中央に竹管文が押されている。突帯以下は赤彩されている。後期のものであろう。31は櫛描の波状文と直線文を交互に施した壺の体部である。32～34は壺の底部である。

35は杯部に稜を有する高杯で、内外面にミガキが見られる。後期後葉のものであろう。

36～47は甕である。36・37ともに頸部がく字状に屈曲し、端部は丸くおさまる。後期のものと思わ



第22図 出土遺物実測図③（1：4）

49：SB1451、50：SD1429、51～56：包含層等、57～66：SD1426、67：2I43P7

れる。38～42は平底で、41・42はやや底面がくぼむ。39の底面には葉脈痕が残る。43～47は台付の底部である。46・47は比較的高く、外面にハケメが見られる。これらは後期のものであろう。48は土製の丸玉である。

（2）古墳時代～古代

この時期は遺構が少なく、遺物は非常に乏しい。古墳時代、奈良時代、平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器等が散見される。

SB1451出土遺物（第22図49） 49は土師器の甕である。短い口縁部を有し、口縁端部をわずかに折り返す。体部には粗いハケ調整がされている。平安時代後期のものであろう。

SD1429出土遺物（第22図50） 50は須恵器の杯蓋で、奈良時代に属するものであろう^①。

包含層等出土遺物（第22図51～56） 51は須恵器の壺であろうか。体部最大径に稜を有し、その上下に波状文がみられる。5世紀代のものと思われる。52は須恵器の杯蓋で、8世紀後半頃のものであろう。53・54は東濃産の灰釉陶器の椀である^②。53は底部が平坦で厚く、口縁端部がわずかに外方へ開く。虎渓山1号窯から丸山2号窯に比定され10世紀後半頃のものであろう。54は口縁部がわずかに外反し端部は丸くおさまる。明和27号窯に比定され11世紀前半頃のものであろう。55はロクロ製の柱状高台の皿と思われる。底面に回転糸切り痕が残る。平安時代後期のものであろう。

56は砂岩の砥石である。表裏両面と側面を使用している。時期は不明である。

（3）中世

当該時期の遺物は包含層から出土しておらず、溝及びピット出土のものに限られ、山茶碗、土師器がある。時期は中世前期におさまると思われる。

SD1426出土遺物（第22図57～66） 57～64はいわゆる山茶碗である。底部は厚く平坦で、体部はやや内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反して端部が丸くおさまる。高台は低く、畳付に粉殻の

痕跡が残るものがある。全てほぼ同時期の型式と考えられ、藤沢編年の尾張型第5型式に比定され13世紀第1四半期頃のものであろう^③。65・66は土師器の鍋と思われ、65は内面が板ナデで、66は外面がケズリで調整されている。

2I43P7出土遺物（第22図67） 67は土師器の小皿で、口縁部外面に1段のヨコナデがみられる。中世前期のものであろう。

註

①須恵器については、城ヶ谷和広氏、尾野善裕氏からご教示いただいた。

②灰釉陶器については、尾野善裕氏からご教示いただいた。

③山茶碗については、藤澤良祐氏の編年を参考にした。

藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要 第3号』三重県埋蔵文化財センター 1994

5. まとめ

久留倍遺跡は、道路建設事業により遺跡の大部分が調査され、その内容が明らかになりつつある。特筆すべきは古代朝明郡に関連するであろう官衙施設の発見である。これらについては調査報告書の作成を実施しているところであり、また、国指定史跡を受け史跡整備を計画している。久留倍遺跡の調査成果は、今後、日本の地方官衙を研究する上で重要な資料になることはまちがいない。

今回の第9次調査では、官衙に直接結びつく遺構、遺物というものははっきりしない。溝SD1429や掘立柱建物SB1451等が関連する可能性はあるが、現時点では疑問符がつくところである。

弥生時代の成果としては、中期の住居が広がっていることが判明したことであろう。G地区では多くが後期の住居であった。小谷SR578を挟んでC地区でも中期の住居が確認されており、ある程度まとまった数の住居が存在していた集落だったのであろう。

第2表 出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	測定値(cm)			成形・調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考
			口径	底径・脚台径	器高						
1	弥生土器	甕	SH1415	不明	7.2	不明	凹底 外面:ユビオサエ	～1mmの粒多い	良好	にぶい褐	底 15
2	土製品	丸玉	SH1415	直径4.5	孔径0.7		表面平滑	～3mmの粒多い	良好	黒褐	約 60
3	弥生土器	壺	SH1428	19.6	不明	不明	受口状口縁 口縁部外面:凹線文5条以上	～1mmの粒少し	やや軟質	にぶい黄橙	口縁 15
4	弥生土器	壺	SH1428	不明	7.0	不明	体部外面:タテハケ 底面:ハケ 内面:ハケのちユビオサエ 黒斑	～2mmの粒多い	良好	外:橙 内:黄灰	底 40
5	弥生土器	甕	SH1428 北東周溝	不明	5.8	不明	台付 外面:タテハケ	～1mmの粒多い	良好	にぶい黄橙	底 30
6	弥生土器	甕	SH1441	不明	5.2	不明	平底 底面:板圧痕 外面:タテハケ	～2mmの粒多い	良好	にぶい黄橙	底 20
7	弥生土器	甕	SH1441 周溝	不明	8.2	不明	平底 外面:タテハケ	～3mmの粒多い	良好	黒褐	底 45
8	弥生土器	壺	SK1417	18.9	不明	不明	広口 口縁端部:凹線文4条 口縁部外面:タテハケ 内面摩滅	～2mmの粒多い	良好	にぶい黄橙	口縁 35
9	弥生土器	壺	SK1417	不明	不明	不明	算盤玉状体部 外面上半:廉状文、2～3条の横櫛描直線文が11段のち7条の縦櫛描直線文、櫛描波状文 体部下半:ヨコミガキ 内面摩滅	～2mmの粒多い	良好	にぶい橙	体部片
10	弥生土器	鉢	SK1417	8.4	4.0	3.8	手捏ね やや円柱状の底部 内外面:ハケ	～2mmの粒多い	良好	橙	90
11	弥生土器	甕	SK1417	29.0	不明	不明	器表面摩滅 口縁部内面:ヨコハケ	～4mmの粒多い	良好	明黄褐	口縁 20
12	弥生土器	甕	SK1417	不明	7.7	不明	底面:葉脈痕 器表面摩滅	～1mmの粒多い	良好	黒褐	底 60
13	弥生土器	甕	SK1417	不明	6.0	不明	台付 器表面摩滅	～3mmの粒多い	良好	にぶい黄橙	底 25
14	弥生土器	壺	SD1007	9.0	5.2	17.0	外面:ミガキか 内面:粘土組織痕跡	～2mmの粒含む	良好	にぶい黄橙	口縁 25 底 100
15	弥生土器	壺	SD1007	12.0	不明	不明	外面:ヨコハケ 内面:ヨコハケのちヨコナデ	～2mmの粒多い	良好	にぶい黄橙	口縁 10
16	弥生土器	壺	SD1007	11.2	不明	不明	短頸 外面:ミガキか 内面:ヘラケズリ	～2mmの粒多い	良好	外:にぶい橙 内:灰白	口縁 5
17	弥生土器	壺	SD1007	不明	不明	不明	頸部に有段貼付突帯	～2mmの粒多い	良好	明赤褐	頸 10
18	弥生土器	壺	SD1007	不明	4.6	不明	底部高台状	～1mmの粒含む	良好	橙	底 50
19	弥生土器	壺	SD1007	不明	8.4	不明	外面:ミガキか	～4mmの粒多い	良好	灰黄	底 80
20	弥生土器	鉢	SD1007	10.4	不明	不明	外面:タテハケ 内面:ヨコハケ	～2mmの粒多い	良好	にぶい黄橙	口縁 20
21	弥生土器	甕	SD1007	11.4	不明	不明	受口状口縁 口縁部外面:櫛刺突列点文	～1mmの粒多い	良好	にぶい黄橙	口縁 10 近江系
22	弥生土器	甕	SD1007	不明	5.1	不明	平底 外面:ユビオサエ、タテハケ 内面:ハケメ	～1mmの粒多い	良好	にぶい黄橙	底 100
23	弥生土器	壺	2J42包含層	18.0	不明	不明	受口状口縁 口縁部外面:凹線文3条	～1mmの粒多い	良好	にぶい黄橙	口縁 10
24	弥生土器	壺	2K43包含層	19.4	不明	不明	広口 口縁端部垂下 口縁端部:羽状文 口縁部内面:刺突文 頸部外面:ナナメハケ	～3mmの粒多い	やや軟質	淡黄	口縁 20
25	弥生土器	壺	2J42包含層	不明	不明	不明	広口 外面:タテハケ 内面:ヨコハケ	～2mmの粒多い	良好	褐	不明
26	弥生土器	壺	2K43包含層	20.2	不明	不明	広口 口縁端部:櫛刺突文、一部竹管文 外面:ナナメハケのちヨコナデ 内面摩滅	～3mmの粒多い	良好	橙	口縁 20
27	弥生土器	壺	2K43 落ち込み	16.2	不明	不明	広口 口縁端部:櫛刺突文 口縁部内外面:ミガキ 肩部:櫛刺突文の中央に櫛描直線文 体部外面:ミガキ 体部内面:摩滅	～2mmの粒多い	良好	橙	口縁 80
28	弥生土器	壺	2K42包含層	不明	不明	不明	広口 口縁端部肥厚 内面に5、6条の櫛描直線文	～2mmの粒多い	良好	にぶい黄橙	不明
29	弥生土器	壺	2K42包含層	不明	不明	不明	体部外面:ヘラ描斜格子文の上下に2条の櫛描直線文 内面摩滅	～6mmの粒多い	良好	外:にぶい黄橙 内:橙	不明 三河系
30	弥生土器	壺	SB1451	不明	不明	不明	頸部に突帯、竹管文 外面赤彩	～2mmの粒多い	良好	にぶい黄橙	不明
31	弥生土器	壺	SK1420	不明	不明	不明	体部破片 櫛描波状文と櫛描直線文を交互に施文	～3mmの粒多い	良好	灰黄褐	不明
32	弥生土器	壺	2K43包含層	不明	6.2	不明	凹底 外面:ナナメハケ 内面:ハケ	～5mmの粒多い	良好	橙	底 100
33	弥生土器	壺	2K43包含層	不明	6.6	不明	内面:ハケ	～1mmの粒少し	良好	明赤褐	底 20

番号	器種	出土位置	測定値(cm)			成形・調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考
			口径	底径・脚台径	器高						
34	弥生土器 壺	2K43 P9	不明	7.5	不明	器表面摩滅	～2mmの粒多い	やや軟質	灰黄	底 30	
35	弥生土器 高杯	2I43包含層	24.1	不明	不明	有稜 内外面:ミガキ	～2mmの粒少し	良好	橙	口縁 5	
36	弥生土器 甕	2K41包含層	16.5	不明	不明	外面:ナナメハケ、ヨコナデ 内面:ヨコハケ	～2mmの粒多い	良好	橙	口縁 20	
37	弥生土器 甕	2L42包含層	18.4	不明	不明	器表面摩滅	～2mmの粒多い	良好	橙	口縁 10	
38	弥生土器 甕	2L41包含層	不明	5.1	不明	平底 内面:イタナデ	～3mmの粒多い	良好	にぶい黄橙	底 60	
39	弥生土器 壺	2L40 P6	不明	5.5	不明	平底 底面:葉脈痕 底部内面:ハケメ	～3mmの粒多い	良好	明褐	底 90	
40	弥生土器 甕	2I43包含層	不明	6.2	不明	平底 器表面摩滅	～2mmの粒多い	良好	にぶい黄橙	底 25	
41	弥生土器 甕	SD1429	不明	8.5	不明	平底	～2mmの粒含む	良好	外:にぶい黄橙 内:黄灰	底 30	
42	弥生土器 甕	SD1429	不明	9.4	不明	平底 外面:タテハケ	～2mmの粒多い	良好	浅黄橙	底 20	
43	弥生土器 甕	2O40包含層	不明	5.1	不明	台付 器表面摩滅	～2mmの粒多い	良好	にぶい黄橙	底 10	
44	弥生土器 甕	2J43包含層	不明	5.8	不明	台付 器表面摩滅	～2mmの粒多い	良好	にぶい黄橙	底 20	
45	弥生土器 甕	2J42包含層	不明	7.2	不明	台付 器表面摩滅	～3mmの粒多い	良好	黄灰	底 20	
46	弥生土器 甕	SD1429	不明	7.5	不明	台付 外面:ハケ	～2mmの粒多い	良好	にぶい黄褐	底 15	
47	弥生土器 甕	2I43包含層	不明	7.4	不明	台付 外面:タテハケ 内面:ユビオサエ	～2mmの粒多い	良好	橙	底 40	
48	土製品 丸玉	2N40包含層	直径3.6	孔径0.8		摩滅著しい	～3mmの粒多い	良好	浅黄	約30	
49	土師器 甕	SB1451P2	17.7	不明	不明	口縁端部折り返し 外面:粗いタテハケ 内面摩滅	～1mmの粒含む	良好	外:にぶい橙 内:浅黄橙	口縁 10	体部最大径19.2cm
50	須恵器 杯蓋	SD1429	15.7		不明	内外面:回転ナデ	密	良好	灰	口縁 5	
51	須恵器 壺か	2J42包含層	不明	不明	不明	外面:稜1条 波状文2段	～2mmの粒含む	良好	灰	不明	
52	須恵器 杯蓋	2J42包含層	不明		不明	外面:回転ケズリ、回転ナデ 内面:ヨコナデ	密	良好	灰	15	
53	灰釉陶器 椀	2M41 P3	14.3	7.1	4.8	内外面施釉	密	良好	灰白	口縁 20 底 50	東濃産
54	灰釉陶器 椀	2N41 P11	14.0	不明	不明	内外面施釉	～2mmの粒含む	良好	灰白	口縁 15	東濃産
55	土師器 皿か	2M41 P1	不明	4.8	不明	ロクロ製 柱状高台 底面:回転糸切り痕	～1mmの粒少し	良好	橙	底 60	
56	石製品 砥石	2N40包含層	タテ7.2	ヨコ6.7	厚さ3.2	3面使用	砂岩			不明	
57	陶器 山茶碗	SD1426	16.2	8.1	4.9	内外面:ロクロナデ 内面に自然釉 底面:回転糸切り痕、外縁に回転ナデ	～5mmの粒多い	良好	灰白	口縁 50 底 100	尾張型 5型式
58	陶器 山茶碗	SD1426	16.6	8.7	5.3	内外面:ロクロナデ 内面に自然釉 底面:回転糸切り痕、外縁に回転ナデ	～7mmの粒多い	良好	灰白	口縁 20 底 100	尾張型 5型式
59	陶器 山茶碗	SD1426	不明	7.5	不明	内外面:ロクロナデ 底面:回転糸切り痕	～3mmの粒多い	良好	灰白	底 80	尾張型 5型式
60	陶器 山茶碗	SD1426	不明	7.6	不明	内外面:ロクロナデ 底面:回転糸切り痕、外縁に回転ナデ	～5mmの粒多い	良好	灰白	底 100	尾張型 5型式
61	陶器 山茶碗	SD1426	不明	7.7	不明	内外面:ロクロナデ	～2mmの粒多い	良好	灰白	底 15	尾張型 5型式
62	陶器 山茶碗	SD1426	不明	8.0	不明	内外面:ロクロナデ 底面:外縁に回転ナデ	～3mmの粒多い	良好	灰白	底 75	尾張型 5型式
63	陶器 山茶碗	SD1426	不明	8.0	不明	内外面:ロクロナデ 底面:回転糸切り痕	～3mmの粒多い	良好	灰白	底 60	尾張型 5型式
64	陶器 山茶碗	SD1426	不明	8.9	不明	内外面:ロクロナデ 底面:回転糸切り痕、外縁に回転ナデ	～2mmの粒多い	良好	灰白	底 85	10mm大の粒含む 尾張型 5型式
65	土師器 鍋か	SD1426	17.8	不明	不明	外面:摩滅 内面:イタナデ	～3mmの粒多い	良好	にぶい黄橙	口縁 5	
66	土師器 鍋か	SD1426	22.0	不明	不明	外面:口縁部・頸部ヨコナデ、体部ケズリ 内面:ヨコナデ	～3mmの粒多い	良好	にぶい黄橙	口縁 20	
67	土師器 皿	2I43 P7	8.5		1.6	外面1段ヨコナデ	～3mmの粒多い	良好	橙	90	

写真図版



現場作業参加者

図版 1



調査区全景（南西から）

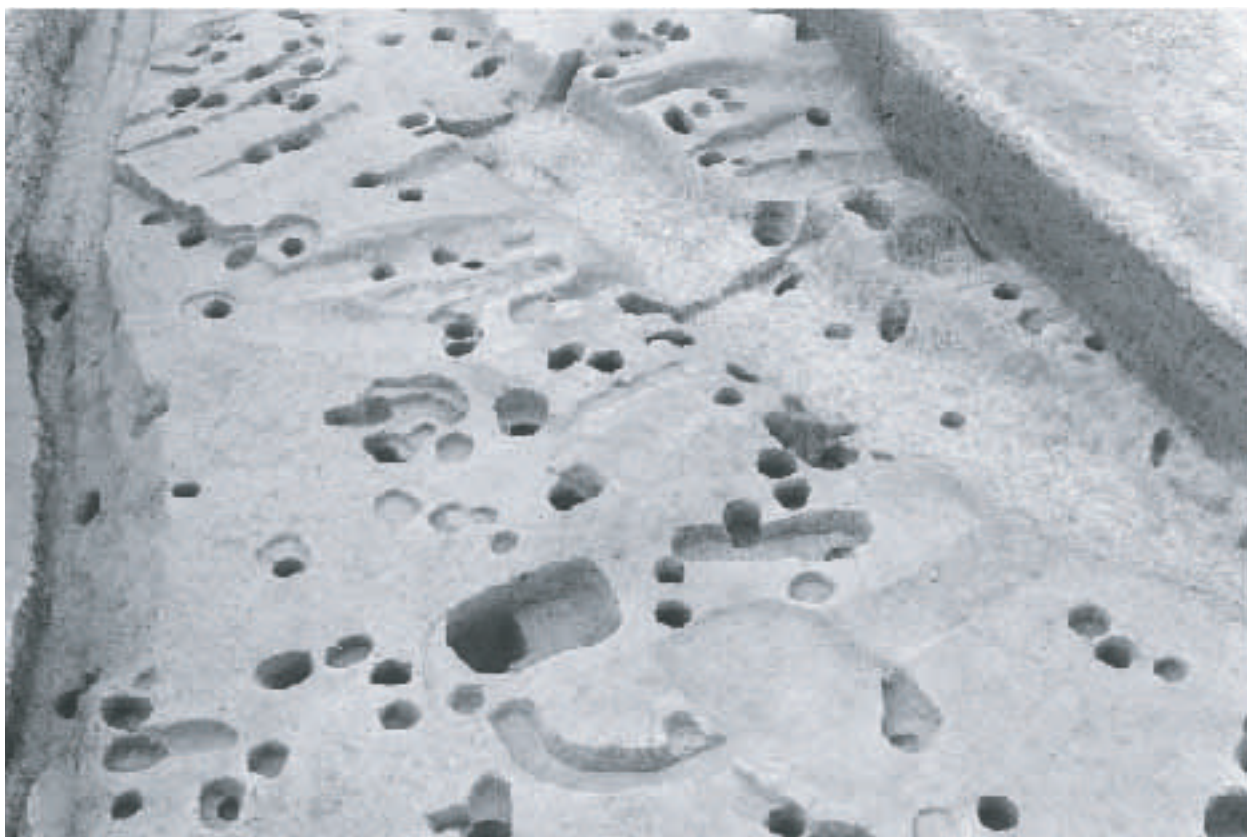


SH1403・1404・1406（南西から）



SH1415・1419・1421、SK1414（北東から）

図版 3



SH1428（北東から）



SH1428遺物出土状況（東から）



SK1417 (西から)



SD1007 遺物出土状況 (北東から)



SD1426 遺物等出土状況 (南西から)

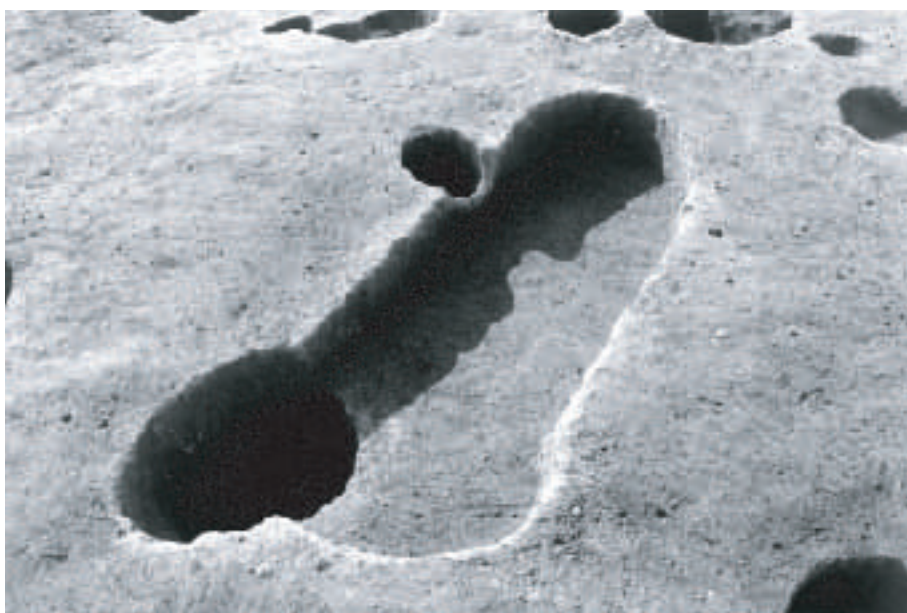
図版 5



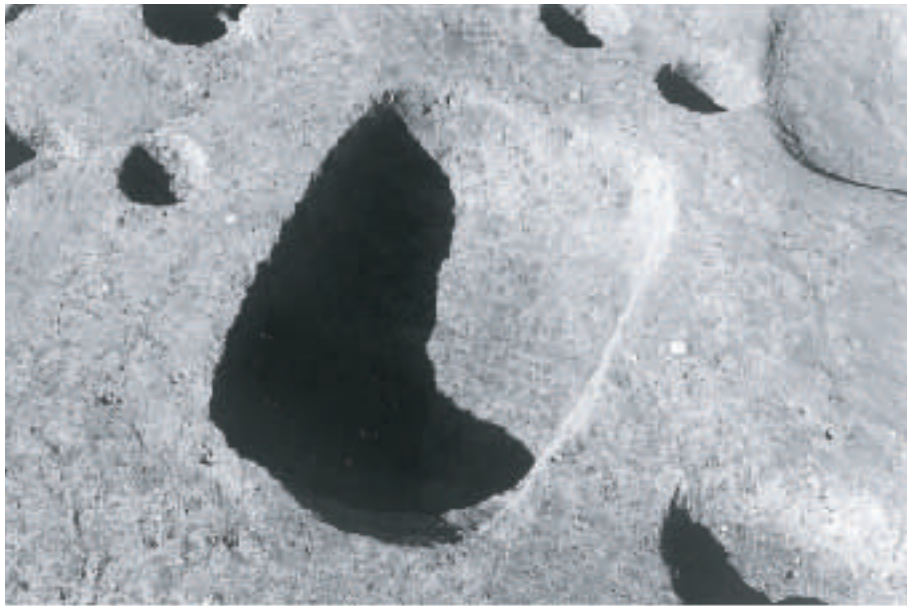
SK1437 (南東から)



SH1441 (北西から)



SK1416 (北東から)



SK1430 (南東から)

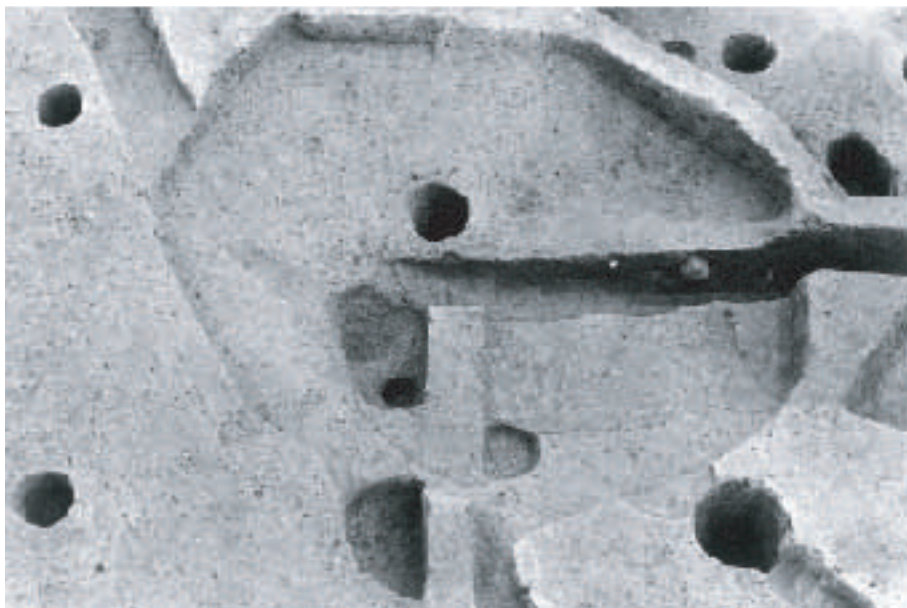


SD1446 (南東から)

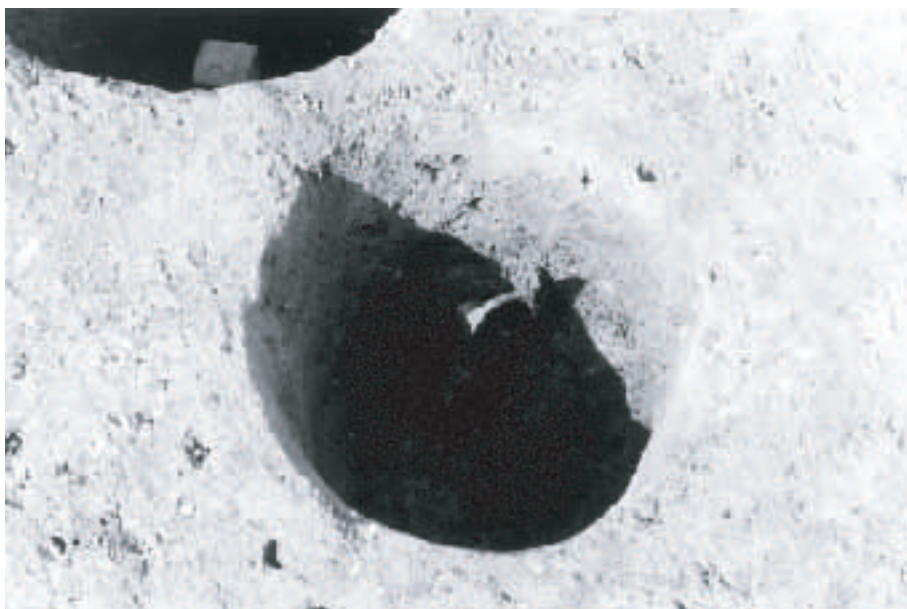


SB1451 P 2 遺物出土状況
(北西から)

図版 7



SK1420 (南東から)



2M41 P 3 遺物出土状況
(南東から)



2 I 43 P 7 遺物出土状況
(西から)



報告書抄録

ふりがな	くるべいせき							
書名	久留倍遺跡3							
副書名								
巻次								
シリーズ名	四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	40							
編著者名	葛山拓也							
編集機関	四日市市教育委員会							
所在地	〒510-8601 三重県四日市市諏訪町1番5号 TEL059-354-8240							
発行年月日	西暦 2008年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				m ²	
くるべいせき 久留倍遺跡	よっかいちしおおやちちょう 四日市市大矢知町	24202	74	35° 00′ 54″	136° 38′ 01″	2006 11 06 ～ 2006 12 28	224	史跡整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
久留倍遺跡	集落 官衙 古墳 墓	弥生～中世	竪穴住居、掘立柱 建物、井戸、溝、土 坑	弥生土器、須恵器、灰釉陶 器、山茶碗、土師器、土製 丸玉、砥石等			今回はK地区、第9 次調査。弥生時代の 集落を中心とする。	

2008（平成20）年3月31日 発行
四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書 40

久留倍遺跡 3

編集・発行 四日市市教育委員会
〒510-8601 四日市市諏訪町 1 - 5

印 刷 畠山印刷株式会社
〒510-0071 四日市市西浦 2 丁目13番20号